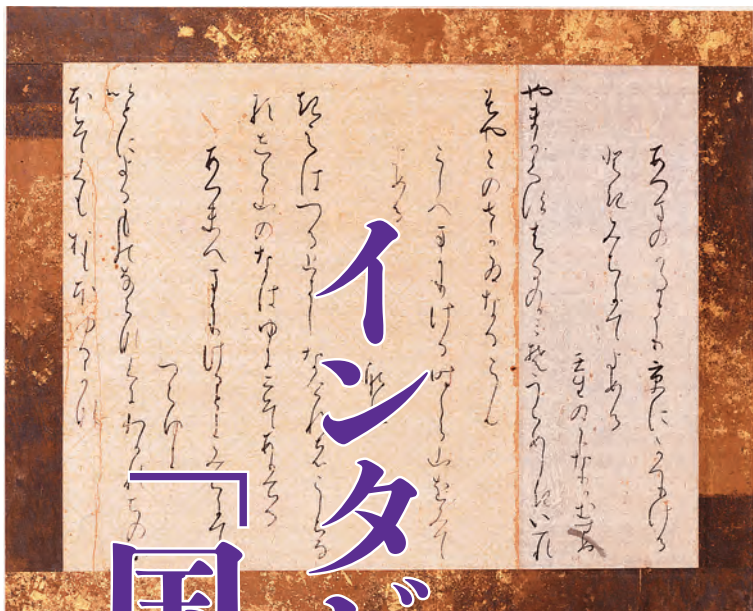


立川の研究者たち

国文学研究資料館 編

インタビューで知る

「国文研」の人と仕事



はじめに

国文学研究資料館長 今西祐一郎

国文学研究資料館（以下、「国文研」）は、今なお日本各地に残されている国文学に関連する古典籍（明治以前に著作、出版された本）の調査とマイクロフィルムによる収集・保存を行い、それを活用して全国の大学の研究者と共同で日本古典文学研究を推進することを目的とする、大学共同利用機関です。

その業務・成果の一端は、展示室における「和書のさまざま」と「日本古典文学史」という二種類の通常展示や、「くずし字で読む百人一首」のような公開講座によって、研究者だけでなく広く学生、一般市民に公開されています。

しかし、実際にそこで研究を行っている教員が、どのようなことをしているのか、は館外の方々にはほとんど分からないと思います。もちろん私たちは「概要」や「年報」という公的刊行物を毎年制作し、その中で各教員の専門分野や業績の紹介をしています。たとえば誰かが「○○の研究」で「△△△△について」という論文を書いているといったことが分かって、専門家以外には研究ならびに研究者のイメージは湧いてきません。

そのような思いを抱いていたところに、立川の情報フリーペーパー「えくてびあん」の編集部から、国文研の教員のインタビューを毎号連続で掲載したいという、願ってもない申し出をいただきました。そして、本年三月までに、見開き二頁を基本とする合計二十三回の詳細なインタビューを掲載していただきました。

清水恵美子編集担当の真摯にして巧みな問いかけと五来孝平カメラマンの精彩な写真で、インタビューは国文研の研究者たちの研究内容と素顔とをあますところなく伝えることに成功しています。

幸にこのインタビューは好評で、バックナンバーをお求めになる読者もおられたと聞いています。しかし、私たちは編集部肝いりの充実したインタビュー記事が、フリーペーパーの宿命とはいえ、多くは読み捨てられていくことを残念に思いい、それを一冊にまとめることはできないかと、編集部にご相談したところ、快諾をいただき、また出版に際しては地元立川の文化振興に多大な貢献をしておられる立飛ホールディングスのご支援をいただくことができました。

御高配を賜ったえくてびあんならびに立飛ホールディングス御両社に心より御礼申し上げます。

立川の研究者たち

国文学研究資料館 編

目次

はじめに	2	江戸時代の立川が面白い！	30
資料館ってなんだ？——館長にきく	2	これからの日本文学研究	32
日本有数の短冊展示「鉄心斎文庫 短冊文華展」	4	禅の国、日本？	34
本質的な悩みを扱う——それが文学	6	ひらめきで生きていく	36
国文研のツボ！それが「保存管理」	8	バチカン図書館とのコラボ	38
見逃したら、もう見られない！	10	異分野交流は国文研から	42
必見！国文研の心臓部。データベースはこう管理する。	12	日本人のこころ	44
アニヲタが集まる理由、国文研にあり！	14	救え！アーカイブズ	46
御伽草子を深く読む	16	サブカルは古典への入口	48
普遍性は時を越える——能の魅力	18	国文研でやっていること	50
過去に学んで今を生き、未来を拓く	22		
命をかける娯楽——芸能「歌舞伎」	24		
「読書空間」——読み手側からの文学研究	26		
『陽明文庫展』担当する面白い先生たち	28		

資料館つてなんだ？ 館長にきく

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国文学研究資料館長

今西祐一郎さん

「館長つておもしろい方ですね」と言うと、「そうですね。ぼくはおもしろいんですよ」と。
「本籍は今も大阪。奈良で生まれて北九州育ち。京都の大学に通って、最初の就職先は静岡。それから二十数年九州大学にいましてね、今は単身赴任なんですよ。自宅は福岡」。
平成二十二年四月より国文学研究資料館長。
どんなことを聞いても、こちらのレベルに合わせて淡々と話してくれた。



——こちらで扱う古典というのはどこを指すのですか？
今西 明治以前です。この資料館は日本古典文学関連資料の調査収集のためにできた機関です。日本全国に散らばっている日本古典文学に関する資料を調査する。調査した事項をデータ化して映像はマイクロフィルムで保存する。資料が遠い所にあっても、資料館にさえ来れば簡単に見ることができるというわけです。また、あつては困るのですが、たとえば火事とか天災によって万一それらの資料が失われたとしても、マイクロフィルムの映像や記録は残るといシステムになっています。ですから、私たちの仕事は、たとえば『源氏物語』はすばらしいという前に、『源氏物語』を研究するための基礎資料を収集して、全国の研究者や興味を持つ人々に提供するということであり、それが国文学研究資料館のもともとの設立趣旨です。

——なるほど。では膨大な数の文献があるわけですね。
今西 そうです。マイクロフィルム類は約二十万点にのぼります。しかし、いくら何でもマイクロフィルムだけでは

立した展示設備は持っていなかったのですが、こちらには、規模は小さいながらも質では国立博物館にも劣らない立派な展示室もできたり、社会連携活動の一環に「子ども見学デー」もあります。八月の一番暑い時、近隣の小学生を対象に「百人一首」のトレーニングをするのです。

——古典つて何が面白いんですか？

今西 古典はそんな面白くないですよ。

——（笑）じゃあ、どうして古典を専門にされたのですか？

今西 それはね、若い頃というのは、人があまりしないこととか、あるいはちょっと難しいことをやってみたいという虚栄心や好奇心がありますね。それでどこがどう面白いのか分からないままに、目の前に聳えている山に登るようなつもりで、『源氏物語』に取りかかってみたのです。だから『源氏物語』を読んで生きる勇気が出たとか、生きていってよかったなどと思ったことはありませんね。これから先は分かりませんが。

評論家の立花隆さんも『僕はこんな本を読んできた』という本の中で、「本当の古典の中身が特別に優れているかというと、必ずしもそうでなく、わりと中身が下らないものがけっこうある」と言っています。では、どうして古典を読まなければならないのか。古典というのはずっと昔から今まで、千年以上、あるいは何百年にわたって読み継がれてきたものです。そして読んだ人がまたそれについていろいろ書いている。本居宣長も瀬戸内寂聴さんも誰でも、源氏なら源氏でね。だから古典を読むということは、そういうこれまで古典を読んできたさまざまな人達の知の世界に参加するパスポートになるということです。源氏に限らず、これまで古典を読んできて、それに触発されていると考えた偉大な人達、その人達の仲間入りができるということ。これが大切なのではないでしょうか。

——なるほどね。鎌倉で香道を習ったことがあります。源氏香です。これがなかなかむずかしい。

今西 少なくとも源氏の巻名くらいは暗記していないとね。それとあらずじ。

——そうなんです。やっぱり教養の部分においてはとても高度ですね。知らないと話に参加できません。

今西 お茶もそうですよ。お茶飲いただけならいいけれど、ちゃんとしたお茶席に行くと、床の間に掛け軸が掛かっていてその崩し字が読めなければいけません。それを読めて、さらに意味が分ければ立派なものです。そしてこれは西行

の歌ですねなどコメントできれば、教養のほどが推し量られる。外国でも同じで、今のハリウッド映画だけ知っていればいいのではなく、ギリシャ古典を知って初めて奥深い会話ができます。西洋の場合は、ギリシャ、ローマも大事ですがやはり聖書です。そういう意味で聖書は最大の古典かもしれません。

——先日「和書のさまざま」の展示を見ていて思ったのですが、源氏物語の注釈がありますよね。後世の人が書き込んだもので、紫式部の書いたものとのものつていっているのではないですか？

今西 ないのです。紫式部自筆はもとより、平安時代の写本すら残っていません。今日、私たちが眼にすることが出来るのは、源氏物語成立後二百年以上経った鎌倉時代の写本が最古です。万葉集でも万葉時代の写本なんか残っていないのですよ。書き写しを何十回と繰り返し、最初は作者や編者による原本があったのですが、日本は火事の多い国ですから、古い方からだんだんに失われ、また源平の争乱や応仁の乱のような内乱によって滅びた書物も膨大な量に上るはずですよ。

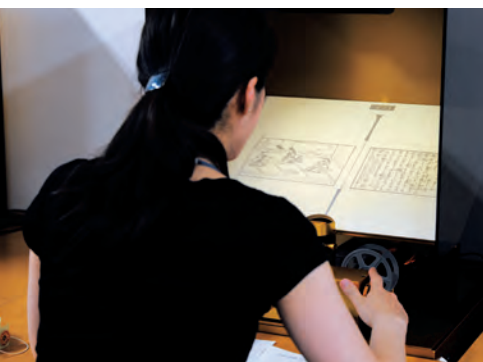
——何千回と書き写されていくうちにどこが変わってきているかもしれないです。

今西 不注意による誤字、脱字、また写すべき行やページを飛ばしたりといった写し間違いはしょっちゅうです。また、写す人が自分の好みや考えで文章を変えてしまうこともあります。

——伝言ゲームみたい。



マイクロフィルム



誰でもマイクロフィルムを閲覧できる

研究は出来ないのです。古典籍の原本も購入したり蔵書家からコレクションの寄贈をいただいたりして一万点以上、研究書約十万冊、日本文学関係の定期刊行物五千誌十六万冊といった資料が、閲覧室と地下の保存書庫に収まっています。

——古典は、日本人でありながら日常から離れた感があります。

今西 そうですね。遠いですね。特に一九八〇年代に始まったゆとり教育で古典が大幅にカットされたせいで、この先の日本の古典を学習していない、そしてその結果古典を読めない、そういう日本人がどんどん増えてくるという事態が予想されます。昨今はまた「ゆとり」が見直されているようですが、それが古典教育につながるかどうか。古典との距離をすこしでも縮められるようにと、私たちは先ほどお話しした資料収集という事業とは別に、日本古典に関する講演会を開いたり、展示を行ったりという形で、社会連携活動にも力を注いでいます。立川に移転してくる前は、独

今西 その通りです。ですから写本はひとつとして同じものはないでしょうね。中世になりますと、武家の天下ですから、源氏物語や古今和歌集を能筆（字の上手な）の公家が書写して有力武家に渡して、その報酬をもらったりということもあります。暮らしの糧にしていたのでしょう。

物語というのは今でいうコミックみたいなもの、つまり娯楽作品です。正式の書物というのは漢字で書いてあるもの。昔は漢字のことを真名（まな）といいましたが、仏教書であれ漢籍であれ、真名で書かれた本がちゃんとした本。それに対して、物語は仮名で書かれました。「仮名」とは「仮」の文字という意味で、つまり、かりそめの文字です。物語というものは、本来そういう文字で書かれた軽い読み物だったのです。それが『源氏物語』の場合は宮廷社会で大評判になって、たくさん書き写されて後世に伝わったわけです。それほど評判にならなくて、今日伝わっていない物語もたくさんあったようです。作品は残らず名前だけ残っている物語が結構あるのです。

——そうか。じゃあ、今のマンガもいずれ古典になるかも、ですね。

今西 なりかけているものもありますね。手塚治虫はもとより、竹宮恵子とか萩尾望都とか。コミックの古典というのが形作られていきます。評判になって多くの人に読み継がれていく、そのことによって作品は古典になっていく。古典は書かれた当初は古典ではない。多くの人に長い間読み継がれ生き延びていくうちに古典になっていくのです。

——極地研の藤井所長がお話くださった中に、「我々は氷を読む」とおっしゃって、明月記に超新星爆発の記述があるけれど、氷床コアの中にその証を見つけたと聞いたとき、すごく新鮮で感動しました。

今西 そうでしょうね。理系の人が文系に関連した話題に触れるととても新鮮に感じます。文系の人が文系の話をしても新聞は取り上げてくれない。以前、統計数理研究所の先生が取り組んでいた源氏物語の文章の統計学的分析を手伝ったことがあります。それがかなり目立つ新聞記事になった。それは、源氏物語研究者である私がやったからではないのです。源氏とは全く縁がなくて、源氏を読んだこともない、計量分析専門家が源氏をやったというので新聞記事になる。

——（笑）そんなもんですよ。だからこれからの連載では、おもしろく古典を紹介していきますよ。

日本有数の短冊展示 「鉄心斎文庫 短冊文華展」

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国文学研究資料館 研究部

教授 鈴木淳さん 助教 入口敦志さん

国文学研究資料館の展示室で平成二十二年十月四日(月)から十月十二日(金)まで、
国文学研究資料館 特別展示「鉄心斎文庫 短冊文華展」が開催される。

短冊だけの展示は非常に珍しく、鉄心斎文庫のコレクションとなると、
おそらく今後はもう開催されないだろうという展示だ。
そもそも鉄心斎文庫とはなんなのか、鈴木先生と入口先生に聞いた。

——このチラシを見ると、歌などになじみのない者にはな
んだか難しそうだな〜という感じを受けてしまいますが、
まずは「鉄心斎文庫とは」から説明してもらえますか？

鈴木 チラシにも書いてありますが、鉄心斎文庫というの
は東京都品川区にある個人文庫で、三和デッキ株式会社社

長だった芦澤新二

氏が創設した個人
古典の一大コレク
ションです。鉄道

に関係していたか
ら鉄とつけたとい
うことですが。伊

勢物語の写本や版
本がそれぞれ四百

点以上、またその
注釈書の写本や版

きたり、またこちらのように下絵が入るものもあります。

——紙を楽しむっていうのはできそうな気がします。書か
れてある文字がなかなか読めない。読めなくてもいいと

おっしゃる先生もいらっしゃると思いますが。

鈴木 それは、やっぱり読めた方がいいです。

——今西館長も日本人の教養として読めた方がいいという
お考えですよね。

本がそれぞれ百点以上あり、伊勢物語の掛け軸や屏風、か
るた、浮世絵、工芸品などが千点以上あって、伊勢物語コ
レクションとして有名です。

——個人で集められたのですか？

鈴木 ええ、そうです。でもコレクションというのはそう
いうものです。短冊も六千点くらいありますか。

——今回はその短冊の展示なのだそうですね。六千点全部
ではないですよね？

鈴木 そこから厳選して二百点くらいの展示です。

——どうやって厳選されたのですか？

鈴木 作者が有名であったり、能筆なものとか。
——私たちがわかるような有名なものって、例えばどんな
ものでしょう。

入口 チラシにあるように、吉田兼好とか。
——ああ、吉田兼好ならわかります。でも、読めないです
よね(笑)。どうやって鑑賞すればいいのですか？この展

——他人の目が入らないとできないですよ。大変なお仕
事だなあとあります。鈴木先生も古典がもともと大好き
だったのですか？

鈴木 いや、日本文学はやりたくなかったのだけれど、受
験の関係でこうなったというか。

——え？(笑)では本当は何がやりたかったのですか？

鈴木 西洋文学の方に親しみを持っていました。でも今に

◎ 翻訳

ゆふしほのみちくるいそのとまやかたけふりはなみのうゑにたつなり 兼好

◎ 漢字を当てた表記
夕潮の満ち来る磯の苫屋湯煙は波の上に立つなり

◎ 読み方
ゆうしほのみちくるいそのとまやがたけふりはなみのうゑにたつなり

◎ およその意味
夕潮が満ちてくる磯の干潟近くに粗末な小屋が建っている
その苫屋から細くたなびく煙は満ち来る波の上に立っているように見える

◎ 解説
三夕の歌の一つとして知られる、藤原定家の
「見渡せば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮れ」を踏まえて作られたものと思われる。

なってみると日本文学をやって良かったかと思えますが。

——私は西洋文学が専門でしたが、国文研に通わせていた
いて国文学についていいあつて思っています。この展示は短冊

だけです。見込えがあると見えはありますが、展示方法
がむずかしそうです。どうやって展示するのですか？

鈴木 うーん。まずは時代で。

——全部、かがんで観るケースだと単調ですよ。

鈴木 もちろん掛け軸になつていいるものは壁面を使いま
すが、それ以外にも今回は別のケースを入れて、立った目線

で見られるようにもしたいです。

——文学という枠と美術という枠とで構成された展示のよ
うですね。

鈴木 そうですね。ただ書家の方に関心をもってもらえる

示の楽しみ方を教えてください。

入口 まず字を楽しんでいただくのが一つです。この人は
こんな字を書くのかという。能筆家と言われた人もいます

から、まず字を楽しんでいただいて、それから紙ですね、
和紙。元は懐紙ですが、それを歌会のために細く短冊にし

て使っているわけです。ですから時代によって紙が変わっ
てくる。最初は懐紙ですが、それを二つに折れば「折紙」、

切れば「切紙」、真四角に切れば「色紙」と言った具合に紙
もいろいろな形になっていますが、ここでは短冊を時代、こ

とに楽しめる展示になります。

——紙を鑑賞するっていうのはおもしろそうですね。

入口 はい。短冊の歴史は鎌倉時代からですから六百年。
同じ形式の中にも違いがあります。まず大きさが違う。装

飾も違う。古い時代は装飾がない白短冊ですね。それが見
せるためのものになり、装飾がほどこされてきます。たと

えばこれは打曇りといいますが、このような模様が入って

のではないかと考えています。詩と書とが一体化した美の
世界ですね。

——実に雅な世界ですね。静とか寂とかという。

鈴木 南北朝時代から江戸時代、明治時代までの美を短冊
という形で表現した展示ですから。

——短冊だけの展示というのは珍しいそうですが。

鈴木 そうですね。たぶん今後はもうこんなに一斉に揃う

展示はないでしょう。

もちろん別の企画に合わせて何点か展示されることはあつ
ても、こうして短冊だけで構成された展示は多分もうない

と思います。

——それを立川でやってくださるのですから、見なかつた
らすごく損ですね。

鈴木 会期中に鉄心斎文庫の現在の文庫長である芦澤美佐
子さんが来館されます。

——講演会があるそうですね。

入口 十月十五日(金)午後二時から、芦澤美佐子さんの
ご挨拶の後、鈴木先生ともう一方の講演があります。短

冊のことがもっとよくわかってくると思いますよ。

講演会情報

○講演会「鉄心斎文庫の短冊」

場所…国文学資料館大会議室

日時…十月十五日(金)午後二時～午後四時三十分

挨拶…芦澤美佐子(鉄心斎文庫伊勢物語文華館)

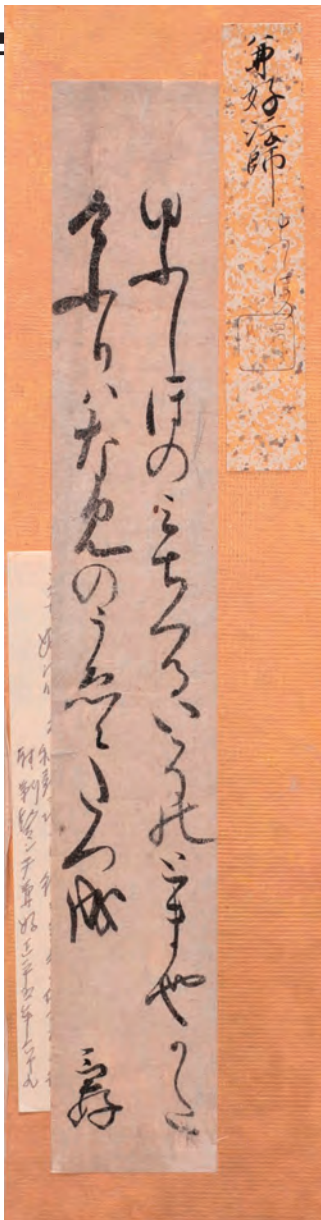
講演…神作研「短冊のちから」

鈴木 淳「短冊書き継がれるカタチ」

入場無料…先着百五十名



鈴木 淳さん：平成29年3月末現在 名誉教授



鈴木 ええ。この吉田兼好の歌も読んでみると、風景をそ
のまま切り取って詠んでいるとわかります。

——なるほど。でも、読めない現代人のために、こちらで
講座とか開かれたらいいがでしょう。

入口 夏に子ども見学デーという企画を行っていて、昨年
私はその担当だったのですが、同じ日本語ですから、小学

生のお子さんたちでも、わかりそうな字をまず見つけてパ
ズルのように読める字から類推して読んで行くと読めてし

まうんです。ですから、それほど難しいことでもないと思
います。

——入口先生はお話していらしても、こうしてこのお仕事
に携わっていらつしやるのが楽しそうですね。

入口 楽しいですね。私は昔「新八犬伝」という人形劇を
テレビで見て、それから古典に興味を持つようになつて、

この方面に進んできましたから。

——でも好きだと言つても、この図録や本の校正は大変
でしょう？

入口 大変です(笑)。
——文字校正って、書いた本人はなかなかミスが見つけれ
ないんですよ。

入口 こういうお仕事をされているからおわかりでしょ
うが、そうなんです。自分ではもうそのつもりになつて書い
ていますので、見過ごしてしまうんです。



入口敦志さん：平成29年3月末現在 准教授

本質的な悩みを扱う

それが文学

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国文学研究資料館 調査収集事業部

教授 寺島恒世 さん

国文研の事業は大きく三つに分かれている。一つは調査収集。全国の研究者と連携して

日本文学および関連する原典資料の所蔵先に赴いて調査研究をおこなう。

二つ目はそれら集めた資料を利用してもらうこと。三つ目は社会連携活動。

今回はその中から調査収集事業部長の寺島恒世教授にお話をきいた。

——寺島先生は研究部研究主幹でいらして併任で調査収集事業部長もされていらっしゃる。

寺島 扱うものは古典を中心に、明治の中頃以前の古いものをいろいろ調べて集めて研究しています。事業は事業ですが、研究とは密着していますね。

——先生の本来の研究は何なのですか？

寺島 和歌です。新古今和歌集。

——和歌はいつから好きだったのですか？

寺島 高校時代の授業で魅了されて。最初に魅せられたのは新古今の一首でした。「見渡せば花も紅葉も



しく」じゃ意味が通じないから、後人が、天皇の筆だから畏れ多いにもかかわらず、明らかに後鳥羽院の間違いだと思っ

てふと書き入れちゃった。以来ずっとそう読まれてきたというわけ。でもよく調べてみると、「松風ぞしく」っていう言い方はあるんです。「しく」は「しきりに」する。松風がしきりに起こるという意味です。

——なるほど。

寺島 しかもなぜ「ふく」だとおかしいかと言うと、「よるなみをふき」と言いながら、また「ふく」を使うと言葉がダブってしま

う。三十一文字の中で同じ言葉を二度使うのは素人。ありえない。この「まつかぜそしく」は斬新な試みだと思

います。これも直筆をジッと見ていてわかってくることなんです。

——文字が口をきくわけですね。直筆の力ってすごい。私も高校生の時和歌の一首に魅了された一人です。「しのぶれど色に出にけりわが恋は」

寺島 「ものや思ふと人の問ふまで」。良い歌知ってますね。百人一首に入ってる平兼盛の歌ですね。壬生忠見の「恋すてふわが名はまだき立ちにけりひと知れずこそ思ひそめしか」と

ベア。天皇が主催した歌合わせで、「しのぶれど」と「恋すてふ」を競わせた。どちらも似ている歌ですよ、秘密た恋をしているけれどつい出ちゃったというのと、恋しているという私の名はもはや噂になってしまったという歌。甲乙つけがたかったけれど、天皇がこちらを吟じていたので勝ったという逸話が残っている。

——現代人の私が聞いてもこっちがよかったわけですか

ら、昔も今も人の感性は「しのぶれど」なんです(笑)。

寺島 僕もこの歌は百人一首の中で相当好き(笑)。ところで、歌もいけれど、実はえくてびあさんにお話ししたいのはこれですね、「方丈記」。「行く川のながれは絶えずして、しかもと

の水にあらず」ね。あの方丈記は今何種類あるか知っていますか？
——何種類って？一つしかないと思いますが。
寺島 ですよ。だからそこが国文学研究資料館の調査収集事業部が存在する理由です。「方丈記」といっても三十種類以上ある。写本で人が写すからどんどん変わって行くということもあります。書き直しちゃっていることもありますよ。そういう書写の場合の問題をクリアするのが僕らの学問であるわけです。もうひとつは作品が違う。——作品が違う？

なかりけり浦の苫屋の秋の夕暮れ」っていう歌です。見渡すと花も紅葉もない。「浦の苫屋」って漁師が住んでいる小屋ですが、それが見える秋の佳しい風景だと、それだけの歌なんですけれどね、すごく魅了されましたね。

——景色が浮かびますよね。

寺島 この歌になぜ惹かれたかという、見渡すと春の花も秋の紅葉もない。浜辺にはセピア色の風景しかないと言っているんだけど、実は「見渡せば花も紅葉もなかりけり」で読者の頭の中には花や紅葉がバーツと幻のように浮かんで来る。そういう仕組みの歌なんです。これは藤原定家の歌ですが、上手いなって思ったのがこの道に入るきっかけ。それで新古今を生み出した時代とか定家に興味を持ち、特に定家と一緒に新古今を編んだ後鳥羽院を中心に研究しています。

——全国津々浦々収集事業をされていて、例えば後鳥羽院のことで何かあつというふうなものに出会うこと、あるのですか？

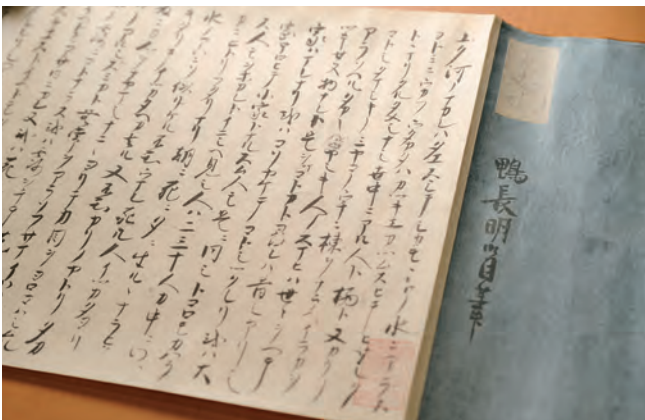
寺島 方丈記は大きく分けて僕らが普通に読むものとうんと短いものがあります。広本と略本。広本は古本と流布本とに分かれこれもそれぞれ何種類もある。日本全国にあるすべての方丈記を集めてきて、研究者の優秀な頭脳で調べてもらう。冒頭で言ったように、調査収集事業なんだけれど研究と事業が密着しているわけです。二〇一二年は方丈記八百年。それにちなんで展示もします。鴨長明の自筆かとも言われているものも。

——それはすごいですね！

寺島 これが太福光寺本といって、明治に発見されて大正十四年にこの写真版が出ました。それで一斉に「これは古い！」ということで、以来日本のすべての読書人はこれを読んでいます。ところが江戸時代に印刷が広まって作られた流布本、明治・大正まではその流布本を読んでいたわけです。それが当時の日本人の方丈記だった。その流布本と太福光寺本を比べてみると、結構違うところがある。つまり昭和以降の日本人はこれを読んでいて、明治・大正までの日本人は違う方丈記を読んでいる。芭蕉もまた別の方丈記を読んでいたということになります。

——たとえばどんな風に違うんですか？

寺島 流布本の方丈記にしかない記事というのがあります。五大災厄という、火事から始まり、つむじ風、飢饉などに続く最後の地震の記事です。ある武士がいてその一人っ子が塀のところでおまごことをしていた。急に地震がきて塀が倒れた。子どもはその下敷きになってピタッと潰れた。そこ、原文では「あとかたなく平(ひら)にうちひさがれて、二つの目など、一寸ばかりうち出されたるを、父母か、へて、声も惜しまず悲しみ合ひて侍りしこそ、あはれにかなしく見はべりしか」です。子どもを失った悲しみでこんな荒っぽい武士でも恥を忘れて泣いていると。本当に気の毒でしょ？こういう記事が江戸時代にはあつてみんな読んでいたのですが、我々が読む太福光寺本



寺島 はい。最近小さな論文を発表したんですよ。自筆のものはいいです。

——自筆がある！

寺島 あるある。これが自筆なんです、今僕が非常に興味を持っている。陽明文庫にある国宝ですね。熊野懷紙という、そんなに上手くないように見えるのですが、これをずっと見ていたらね、この字が違っていてね。こういうところが本物を見てわかる。「うらさむくやそしまかけてよるなみをふきあけの月にまつかせそ」、ここが問題なんです。

——松風ぞ吹く……。

寺島 そう。後鳥羽院が亡くなって八百年くらいずっとそう読まれてきたわけです。ところがよく見てみると、この「ふ」っていう字、薄いんですよ。僕の結論からいうと、これは後鳥羽院の字ではない。後鳥羽院の字は「よるなみをふき」の「ふ」。この変な薄い「ふ」は、もともとは「し」で、「まつかせそしく」って書いてあります。でも「松風ぞ

にはないんです。これについては説が二つあって、長明自身が書き変えたという説と、別の人が付け加えたという説と。学界でも議論になっていきます。

——それをどうやって調べるのですか？

寺島 それが難しい。方丈記八百年にはシンポジウムも計画しています。そこでも議論になるでしょう。

——あらゆる文献についてそのようにされているわけですね？

寺島 ええ。調査と収集の事業は全国の研究者を動員して、そのご協力のもとに行っていますが、集められたデータはすべて当館の保管となる。資料の利用はこちらに来ていただくしかないんです。それで今進行中ですが、収集したマイクロ資料をデジタル化し、インターネットにより全国どこからでも利用してもらえるようにしています。マイクロ資料のデジタル化は、本事業部が中心に関わる計画で、国文学の活性化のためにも全世界から誰でも自由にアクセスできる仕組みは、とても望ましいですよ。

——ところで方丈記って、四角い庵だからですよ？

寺島 そう、出家して四畳半ほどの方丈の庵を建てて住んでいたんです。出家するっていうことは全部を捨てること。全て捨てるとはこだわりを捨てること。長明も頑張つて捨てただけけれど、実は彼はかなりの音楽家で、琵琶と琴を庵に持ち込んだ。それにこだわっているね。

——へえ。

寺島 方丈記の終わりが面白い。結局「私は全部捨てた。すっかり捨てた。こうして四畳半で楽しく暮らしている。ここが最高だ」って書いてある。ところが、「こうしていいって言っていることが間違いないか？」「四畳半暮らしがいいんだって言う私はダメな人間なんじゃないか？どうしよう」で終わっているんですよ。

——こわいんですね(笑)。
寺島 出家して、無一物にならなさいって言われているのになれなかった。私って一体なに？みたいなところで終わっている。本質的な悩みですよ。それが文学なんですよ。

国文研のツボ！ それが「保存管理」

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国文学研究資料館 研究部

准教授 青木 睦 さん

国文研の地下に行くとも膨大な資料が整然と並んでいる。静かなはずの収蔵庫。

でもなんとなくザワザワするのは、昔の人の声が聞こえるから？

今回は保存管理の専門家、青木睦先生の登場だ。

——保存のお話ということですが、先生はどんなことをなさるのですか？

青木 国文学研究資料館には、国文学に関する古典籍・和古書が三万七千点、歴史資料が約五十万点収蔵されています。

す。国文学研究資料館の前身が品川の戸越にありました。ここにある古文書は、歴史的に重要な江戸時代の資料を戦後の動乱で散逸してしまふのを防ごうと昭和二十六年に文部省史料館が設立された時からのものです。今で言うアーカイブズ（記録遺産）ですね。資料を出納したりするにはアーカイブズの内容についてレファレンスもしなくちゃならない。それには古文書が読めなければということ、私は大学一年から江戸時代の古文書を勉強していたので一応古文書も読めたし。大学卒業してからここで働いています。資料を整理して目録を作って。平行して、資料自体が劣化しないようにどう保存するかということも誰かがやらなきゃならないわけで。それならということで。ここに乾燥させている状態の宿紙しゆくしがあるけれど。

——宿紙ってなんですか？

青木 江戸時代のリサイクルペーパー。色が違うでしょ？グレーになっているのは煮溶かしてリサイクルすると墨が混じるから。これは信濃国松代藩の真田家の古文書。

——本物？

でも若い人が多く育って頑張っています。ここでやるのは簡単な部分的修復だけ。保存管理をするにはこの程度の修復は教えます。専門家に修復してもらうにしてもその技術を知っていないと、その資料をどの技術で修復したらいいかがわからないですから。

——この二つはどう違うんですか？

青木 これは学生さんの実習用なんです、触ってみるとわかります。触ってみて。

——あ、ほんとだ。こっちは厚い。

青木 そう。こっちは裏打ち用の紙を貼付けて虫食いを修復しているのね。こちらは繊維を砕いて虫食いの場所だけに繊維が入るようにしてある。リーフキヤステイングという方法です。

——それにしてもこれを一つつつ状態を見て、必要なら修復して、それからラベルを貼って……。すごい手間がかかりますね。

青木 すっごい手間。それに文書が読めるだけでは目録作れないですよ。今も、松代藩の家老だつてすぐわかったでしょ？誰が何のために誰に出したかということ、わかりやすく目録にしてあげないと一般の人にはわからない。目録を取る時には、例えば松代藩なら松代藩、土浦藩なら土浦藩の状況をきちんと勉強して、その資料がどういう所で作られたかその組織図をちゃんと頭に入れてやります。

——昔の人と友達にならないとできないですね……。

青木 あとで地下の収蔵庫に行ってお見せしますが、資料を保存するにはこの包材を使います。資料の厚さが何センチでもうまく収まるようになっています。効率的にやっていると、五十万点の資料をラベル貼りながら整理していたら私があと百年生きても終わらない。一点一点封筒に入れる作業の前に、箱ごときちゃんと保存して、光や埃、湿度の変化、熱や汚染物質がつかないようにパッケージしておくわけです。保護措置です。

——本物を保存するって大変だけど重要ですよ。

青木 オリジナルのものからしかわからないことってありますね。今は重要文化財の春日懷紙かすがいというものがあって、これが透過光で撮った写真。でも糸目の状態はオリジナルじゃなきゃわからない。ここに糸目の状態はオリジナルが三極みつた。これが楮こうぞの紙。それから雁皮がんぴ。ほんとだ！触るとすぐわかりますね。

青木 触った手の感触だけじゃなくて、紙には匂いもあって、あと音。そういつたオリジナルだからわかることを、ちゃんと調査できるように保存されていなきゃならないわけです。

——すっごいお仕事だ……。古いものはさっきの資料みたいに虫もつきますよ。

青木 そう。これを食べたのはシバンムシ。

——どの虫が食べたのかわかるんです。

青木 うん。これがフルホンシバンムシ。でもあれを食べたのはケブカシバンムシの方だと思う。穴が大きいんですよ。こっちは子孫が体がちっちゃいから食べるときの幅が違うわけね、この子の。

——この子（笑）。

青木 幼虫の時しか食べないんだけどね。大人になったらもう食べない。あとは結婚相手を探すだけ。本の敵はだいたいこのシバンムシで、甲虫類です。あとチャタテ虫って小さいミジンコみたいな透明なんですけど黒く見える……。

——よく古い本開けると、チチチって歩いているあれ！

青木 うんうん。あとイガはよく洋服につきますよね。シミ（紙魚）っていうのは表面をなめるけど、穴を開けてしまふのはシバンムシです。洋服が食われるのはイガとかヒメマルカツオブシムシ。これはすっごい。外にシーツとか白いものを干すと、成虫が飛んで来てそこに卵を産むの。それをしまつて押し入れに入れるとそこで幼虫になって食べちゃうわけ。

——外に干さない方がいいのか……。

青木 そういう虫の性質をよく知って、薬剤をできるだけ使わないで一番貴重なものを保存管理するところ、それほどなくていいところとか分けて、集中的に管理するところにトラップをかける。メスのフェロモン置いてオスを捕まえる。オスが少なくなると結婚できないから、子どもが少なくなる。そうやって減らすんです。虫が入って来ないようにするのも大事なので、当館は全部に網戸がついています。

——極地研にもついています？

青木 ついてます。ただエントランスについていなかったのはショックだった。

——保存管理ってただ湿度とか温



青木 本物！本物しかないの、超！五十万点。

——すっごい。

青木 資料をお見せする時に、わかりやすくするためにこうして資料に影響ないようにラベルを貼るんです。資料には表題なんか書いてないから、この資料を読んで、例えばこれは真田の家臣が行事に出発する順番が書いてある。家老が書いたもの。メモ書きとか断片かなと思われものもこうして表題をつけて保存します。その際に、ラベルでもなんでも不純物が入っていて資料に影響が出てしまわないように、一つひとつ材料は検査して使います。ラップ類なんかもそういう安全試験を通すのですが、それと同じです。

——これは虫食いなんですか？

青木 そう。閲覧する時に丁寧にみてもうらえは大丈夫な場合はそのままにしますが、見づらいつきはちょっと留めたりします。

——つまり修復ですね？

青木 専門的な修復はしないで。専門的な修復士は日本

度の管理しているだけかと思っていました。

青木 それはもちろんして。保存管理って部屋の掃除と同じ。どこがどう汚れているかまずチェックするでしょ？資料保存も環境チェック、温湿度、粉塵、カビ、虫のチェック。その中に収納されている資料の状態をチェックする。まず保護措置しておいて、次の段階で「ああ虫食いがありましたね、リーフキヤステイングしましうか」って進める。ちゃんと保存してあればすぐにやらなくていいわけ。だから修復も大事だけれど、その前にきちんと保存することが大事です。急激な変化を避けることも重要で、正倉院だつて除湿はしているけれど温度はそのまま。展示するために外に出たりするわけだから、保管状況だけ一定にしている意味がない。

——なるほど。

青木 当館もそう。急激に低湿にしたり低温にしたりするわけじゃないです。資料を移動する範囲の中での環境の変化をとにかく小さくしておく。こういう場合判断を間違えないために、日本だけじゃなくて海外の事例、建物の構造や材質も調べます。塗料なんかも国内で大丈夫でも、海外の場合にはもつとシビアなことがありますからね。これまでもアメリカ、カナダ、北米、ヨーロッパ各国、イギリス、ドイツ、オランダ、中国、韓国……。今は韓国のこの施設が一番すっごいです。今の世界的レベルで最も良いと思われる部分は全部取り入れてますね。

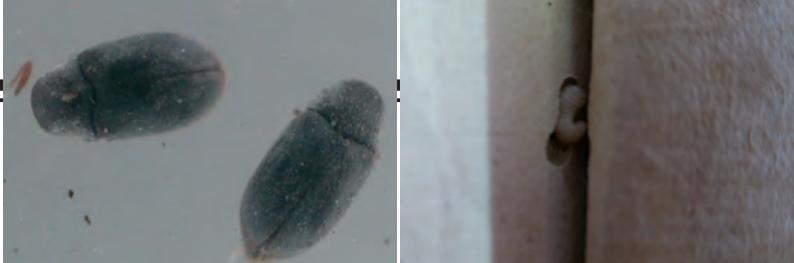
——日本はどうなんですか？

青木 日本はもう一歩かな。コンパクトに自分の資料を守るために必要最低限のことはやっている。意識はあるのに予算がつかないかな。

——予算がつかないということはやっぱり意識が低いんじゃないですか？重要性を感じないとか。

青木 そうそう。だからアビールアビールしなきゃいけない。ただアビールのしやすさってありますよ。立川からタクシーに乗って「極地研」っていうとすぐわかるけど、「国文学研究資料館」って何やってんですか？って。

——でも国文研には国文研の面白さがありますよ。深いし、日本人でよかったな〜って思わせてくれるから。



フルホンシバンムシの成虫と幼虫



大岡越前自筆日記
手続きをすれば誰でも閲覧可能

見逃したら、もう見られない！

国文学研究資料館研究部教授 総合研究大学院大学教授 日本文学研究専攻長

文学博士 中村康夫 さん

珍しい展示を次々開催する国文研。新年最初の展示は「新収資料展」。

奈良絵本「うつほ物語全五巻」を2セット同時展示。

連綿と命をつないで今自分があることを考えると、

展示資料の中にもしかして、あなたの先祖がいるかもしれない？



——先生のご出身、大阪ってどちらなんですか？

中村 松虫って知ってるか？天王寺の南へ約一キロぐらいの所。チンチン電車で二駅。

——チンチン電車、あれ風情があつていいですよ。

中村 座るところボコボコやけどな。クッションが滅茶苦茶や。こないだ乗ったけど。松虫なんて昔良かったんだよね。松虫って言うのは後鳥羽上皇に仕えてた女性の名前。宮女の名前だったんだよね。出家してその塚で最後を引き取ったというのでね、松虫塚ができた。

——先生はなぜ古典へ進まれたんですか？

中村 得意な理系の勉強とか現代文なんて教えてもらわなくても自分でできると思っただろうね。実際はとんでもない事だとは思うけど。その当時、思いがりが強かったのか、何か物凄くある種の自信があつて。古典の世界は人に教えてもらわないとサッパリわからないから。

——古典もいろいろですが。

中村 うん、同じやるなら当然ルーツだと。やっぱり古典

中村 うーん、僕は、親はおふくろしかいないわけだから……。

——そうですね。古典にはそういった親子のいい話はないんですか？

中村 ないない。ほとんど成功した人の話ばかりだもの。

——人が読みたいものって成功物語なのではないか。今西館長が、今日まで残っているものは大ベストセラーで、その周りにはいっぱい残らなかったものがあるのだとおっしゃっていましたが、ベストセラーになる秘訣？は古典から学べるのではないかと思っただけです。

中村 もちろんですね。

——歴史物語などは、そういうものを読まずして、どうしてこれから先の事がわかるの？っていう気持ちにもなったりですね。

中村 今を知りたければ今書かれたものを読んだらそれはそれで良い。だけど、人として、人間は今まで長い歴史の間に何を求めて来たんだっていう話になってくると、当然過去の文物に触れざるを得ないわけ。過去の色んな変遷を追いかけないと、所謂普遍的な、自分が大事にしているような価値意識というか、そういう物は手に入らないと思うんですね。

——そういう意味に於いても、国文研の持つ資料や研究、事業を国民にPRするって必要じゃないですか？

中村 それはだから展示でやってるわけね。できるだけわ

をやる以上は、なぜそんな事がその時に始まったのかという事をちゃんと理解しないと、文学研究したことにならんだらうと思つて。もちろん古事記、日本書紀、万葉集とか古い所は当然その問題がある。でも、平安時代になつても物語が始まる、和歌が始まる、歴史物語が始まる。平安時代にも始まることがいっぱいあつて、始まりというのはどこからでも良いわけだけど、だったら平安だと。平安の物語文学からとりあえず入ってみようと思つたの。

——それで？

中村 家は貧乏だったんですよ。貧乏だった。父がいなかったからね。おやじは僕が生まれて間もなくに死んでしまつた。おふくろが女手ひとつで男の子三人を育てていた。僕は神戸大学なんだけど、入学式が終わって授業が始まるという時、そのおふくろがなけなしの金で「康夫、お前に本を買ってやる」と。一緒に本屋に行こうと言つて、最初に買ってくれた本が栄花物語だった。歴史物語ですよ。それが知らず知らずの間に自分の専門になつてしまつた。

かりやすい展示を心がけているんですよ。

——聞くところによりますと、次の展示は先生がまとめていらつしやるそうで。

中村 新収資料展は僕が一番トップに立つてやってます。

——では今日はこの話をしなきゃいけないんじゃないですか？

中村 うん、なかなか入れへんと思つて（笑）。

——失礼しました（笑）。新収資料展示ってことは新しく集めたものって事ですか？

中村 そうそう。最近購入したものを中心に展示します。ここ二三年ということではなくて、もうちょっと広い目で新しく購入したもので展示テーマを考えてみよう。その時に必要ならばもつと昔からあるようなものも入れてもいい。新しく購入したものを並べましたというんじゃない、見て面白い展示。入口から入った人が、出口へ出る時にふつと何かこう頭の中に残つてる様な展示にしたいなと思つて、それでテーマ展示を考えるようにしたんです。去年はどういうわけか資料購入費がたぐさんありまして、その中でうつほ物語の奈良絵本とというのが購入できたんです。

——この一番と二番にうつほ物語があります？

中村 一番は九州大学のもの。うつほ物語絵巻の中に当館蔵と九大蔵と両方あるんです。当館蔵は去年購入できたんですよ。これ高いんですよ。

——どこから買うんですか？

中村 古籍商、古書籍商というんですか？所謂古本屋さん。今回国文学研究資料館蔵として、うつほ物語絵巻五巻を購入した。これは今西先生がご推薦のもので、先生が考えておられたのは、九大にもうつほ物語の奈良絵本五巻がある。世の中には四点か五点しかないのですが、その内ふたつあるって言うのはすごいじゃない？

——すごいですね

中村 その二本を並べてしまえと館長が考えられて。そうすると、平安朝の物語を軸にして、そのうつほ物語の奈良絵本なんかメインテーマにしながらね、その関連の新収資料というものを並べると良い展示になるんじゃないかとね。

——ふたつのうつほ物語には違いがあるんですか？

中村 全然違うんです。違いがあるんですかじゃなくて、全然違う（笑）。もちろん文章は一緒ですけどね。だけど絵は全然違う。同じ絵はひとつもない。絵師が違うんです。

——栄花物語って高校の教科書とかにはあまり載らないですよ？

中村 そうですね。ところが、平安時代の文学資料としては一級資料。源氏物語のすぐ後にできた歴史物語で、藤原道長の事を知らうと思えばもう絶対欠かせない文献だし。

——そもそもなぜ栄花物語を買って貰ったんですか？

中村 それまでに源氏物語研究会を始めてたんですよ。源氏物語をやるんだったら当然栄花物語知らなきゃ。けれど栄花物語は一冊も持てなかった。

——なるほど。お母様はまだご健在でいらつしやる……？**中村** いやいや、昭和五十八年に死んでしまつた。縫物というのは、仕上がったものを座布団の下に敷いて圧しをして次のものを手がける。一日中座りっ放しなわけです。足を畳んだままでのがたたつたのか、病氣になつてしまつてね。兄貴と交代で病院に泊まり込んで看病していたんだけど、僕が泊まつた時に息を引き取つた。

——先生はお母さん思いなんですよ。

これは奈良絵本の特徴を表していて、単品作り。ひとつずつ手作りで、その時の担当者が違えば当然絵も違う。だから、先ほど四点か五点しかないと言いましたが、たぶん四点五点とも全部違うんです。

——ふたつが全然違うってわかるように展示して下さるんですか？

中村 つていうか同じところがないんだ。こんなに同じです、ここだけ違いますよという展示の方ができないの。どこ並べてもどこを比較しても違いますよという展示にしかならんから。

——（笑）あー。わかつたような、わからないような。

中村 だからね、どこ見て貰うんだつていう事が非常に難しい。違うでしょ？つて、どこ見ても違うよねつて（笑）。だから、どこを見て欲しいんだつていうことが非常に大事で、それは専門の人に任せて。

——そうか。見なきゃわかりませんね。わかつたのはふたつが並ぶのはとても珍しいこと。

中村 まずないですよ。

——私もいつも思うんですが、こちらの展示って、いつも「まずないだろう」という展示ですよ。だから見ないともつたない！

中村 もつたないない、もつたないない。

——わからなくても見るだけですよ！

中村 見るだけです。こいんです。そこにね、私としてはちよつと力を入れたいなと思つてるのは軍記。平家物語とか平治物語は軍記物語と言われるものですが、軍記と言われるのは読み物じゃない。読み物じゃないと言つておかしいかな？要するに、戦乱が起つた色々な事情や事実関係などを記録に留めて後世に残そうとしたもの。それは平将門の内乱に関して言えば将門記があるとか陸奥話記とか。それから承久記、明德記、応仁記あたりがそうです。この辺のものはうつほ物語絵巻とは違つて豪華さはない。非常に素朴な本。むしろ展示に堪えないようなレベルの本かもしれないです。けれども、こういうのは逆に言うと展示されることがないです。平安の物語から中世の軍記物語、さらに中世の軍記へとストーリーが描けるならば、滅多に表に出ない様な文献も一緒に見て貰えるんじゃないかしらと、その辺まで並べてみたいなのと思つています。

——軍記の事実の中で、私たちの先祖に会えるかもしれないですね。楽しみです。



中村康夫さん・平成29年3月末現在 名誉教授

必見！国文研の心臓部。

データベースはこう管理する。

国文学研究資料館

教授 博士（工学）

古瀬 蔵さん

国文学研究資料館

管理部学術情報課学術情報係

和田 洋一さん

国文学研究資料館は、

国文学の中でも古典に関する資料を収集、保管、公開するのがその役目。

今月は膨大な資料公開へ取り組み、エキスパートの登場だ。

——国文研の方の名刺に博士（工学）って書いてあるの初めて見ました。工学部のことですか？

古瀬 そうです。工学部出身です。専門は情報処理。機械翻訳とか情報検索とかといったテキスト処理ですね。

——工学部出身の方がなぜ国文研にいらっしゃるのですか？

古瀬 僕はここに来て四年です。それまでは長く民間会社の研究所にいました。民間の理工系工学部出身ということやっぱ技術です。が、還暦まで技術畑でいられるかというところまで来ると、研究者としてのピークは過ぎている。あとは大学へいって研究を続けるとか関連会社で研究そのものではなく研究を活かしながら管理の方に関わるとか。私もそういう節目に来まして、第二の人生というところとおげさですが、公募でこの教員になりました。文学が好きかと聞かれれば、まあ嫌いではないけれど別に得意ではないですね。

——文学知らなくてもやれるお仕事ではあるわけですよね。

古瀬 そうですね。中身に入らずともブラックボックスとして捉えてシステムを作って行く。ただ理解しようとした方が仕事はやりやすいです。おかげで今まで知らなかった、源氏物語には原本がないなんてこともわかったし。源氏物語の登場人物十人まだ言えませんが。光源氏ね、恵まれ過ぎていて同情できない（笑）。

——先生のここでのお仕事というのはデータベース作りですか？

古瀬 基本的にデータベースは文学の先生方に作っていたでいて、私はそれをどう見せるかという、データベースシステムを運用というか、もっと高度に情報検索しやすくする。ソフトウェアもハードウェアも環境が頻繁に変わるのです。ソフトと動かし続けるというのは結構大変なんです。作った当時のものがいつまでも良いわけではない。昔のケーストップやフロッピーディスクも段々使えなくなってきました。計算機の世界はそういうことが非常に激しくて、維持することというのは新しい環境でも使えるようにしてあげること。古い機能のまだまだと利用者も利用し

てくれなくなりますからね。国文研のデータベースに魅力を感じてもらえるようにできるだけ高度な機能を、といっても高度すぎず。文学の研究者の方々にも広く使っていたで、かつそれでいて高度な機能でアクセスしてもらいたいということでしょうか。

——和田さんは何をなさっているのですか？

和田 データベース全体の事務的とりまとめのようなことです。プラス全体の中の一部のコンテンツを担当しています。

——国文研のHPにはデータベースのコーナーがあります。あそこは先生方が作っていらっしゃる？

古瀬 最終的には。

——最終的といいますと？

古瀬 先ほど言いましたようにデータベースそのものは文学の先生方がそれぞれ作っています。ですがときどきゲリラ的にデータベースを作った来られるときがありまして、もちろんこれを公開してよいかとか国文研の資源を使っているで公開する価値があるのかとか審議はします。

——資料を公開していく上で今抱えている問題点は何ですか？

和田 画像はやはり公開していくべきだということで、当館所蔵の和古書や所蔵している方のところへ撮影に行った資料など、山ほどあります。許可がとれて公開できるものはしようという方向性にはあるのですが、画像データがとにかくすごい量。何十年かかるかわからない。やっっているんです。やっっているんですが、例えば当館蔵の和古書のほんの一部を撮影しただけでその画像が十テラバイト越えちゃったんです。

——それをどう公開する……。

和田 それはまだこちらが対応できていなくて、どんどん撮っちゃって保存、保存。全部撮影したらどのくらいの量になるのか……。ちよつと解決方法は模索中としか言えないです。

古瀬 作った後も問題でして、電子化してあればいつまでもあると思われがちなんです。が、やっぱりある時ポツと無くなってしまうというのが電子ファイルの怖いところ。紙だけでなく、電子的なところにも以前登場されていた青木先生みたいな保存管理の専門家が……（笑）。

——必要なですね（笑）。

古瀬 必要ですね。USBメモリーなんて、入れてたデータが五年くらいでなくなると言われていますし、ディスクも……。

和田 ディスクも同じです。昔のDVD-RAMが結構あるんです。でも読み出せるドライブがない。DVD-RAMってケースに入っているDVDみたいな……。



古瀬 蔵さん：元教授 平成29年2月4日逝去



和田洋一さん：平成29年3月末現在 管理部学術情報課専門員

——四角いケースに入っているものですよね？

和田 そうです、そうです。そういうのが何千枚かあって、開けば読めるという形式のものもあるのですが、開ける作業も大変だし、また開けられないタイプのものはアウトです。

古瀬 まず読み出す機器の確保。読み出せないというふうもないので、それを確保する。その間に次のメディアに対策を考えないといけません。

和田 媒体に変換を考えないといけない。常に目配りしていないとだめです。

古瀬 こういった所にも管理の予算と人が欲しいですね。データを作ることに気持ちが行っていると、作ったものがどうなっているのかが抜けてしまう。

——作っただけじゃないんですね。

和田 画像だけじゃないですよ。データもデータベース自体が腐れてしまうことがあるので、とにかく常に押えておかなければならないというか。

——すごい仕事量ですね。こういった問題は一般企業や事業所などでも感じているのではないですか？

和田 でもここは古いものを保存しておくことがミッションなので、プレッシャーは感じています。

——問題としてはやっぱり画像が一番ですか？

和田 最近のトレンドというか、方針として画像公開を打ち出しているの、画像の問題が浮き彫りになるんですね。

古瀬 画像の問題としてはどのくらいの鮮度、質で画像を出すか。古いのは重いし。

和田 今は規格が決まっていますが、古いものは古い規格

で撮っているのでしたくないです。モノクロ2値っていうのがあって、結構粗い感じですが仕方ないかなと。

——実はえくてびあんで苦労しているのは画像データの色です。画像を国文研から提供していただいても、実物を見ていないですから、印刷した時に本当にその色でいいかどうか私たちにはわからない。

和田 紙焼きを一緒につけてもらうしかないですね。

——多摩でばこネットの記事とリンクして「画像はこちら」ってしたら、えくてびあんは楽です。館蔵はどのくらいもうアップされているんですか？

和田 一万数千点あると言われていて和古書の中から千五百点くらいかな。

——あ、そんなに公開しているんですね。でもその中にリンクしたい画像がなかったら問題ですね（笑）。

和田 マイクロフィルムの分を公開するとなると桁違いですよ。数十年かかってしまう。

——その間にシステムが変わったり……。

古瀬 人も変わるし。画像だけじゃないですよ。テキストも結構ある。目録が多いんです。テキストの保存も公開も、本のどこ、何ページの何行目にどう書いてあるかっていう状態を残してテキストデータとして出すことが求められる。書き込みがあったら、書き込みにまた書き込みがあったらどうするか。現在は使われていない漢字とか、判読できない部分とか。それをどうやってテキスト化するか、漢字の「へん」だけわかってるものをどう決めつけるか。改ざんすると問題ですから。それらをまじめに考えると大変です。

——そんなの画像でボンと出せばわかるわけですよね？なぜテキストにしなきゃならないんですか？

古瀬 検索する時にやっぱりテキスト化されているとありがたいという声があるの。

——先生がなさっている研究と事業にはどういう違いがあるのですか？

古瀬 まあ両方が近い。いわゆる応用研究なのでデータベースというキーワードは共通です。研究の部分で冒険できる部分と事業の部分で堅実にやらなきゃならないところと。ようするにディベロップメントです。サイエンスというよりテクノロジ。

——研究開発っていえばなんとなくわかりますね。先生も和田さんも大変なお仕事なさっていますよね。

アニヲタが集まる理由、国文研にあり!

国文学研究資料館 総合研究大学院大学日本文学専攻

教授 山下則子 さん（ペンネーム 高橋則子）

アニメ、漫画ブームは今や世界的!

日本の誇る文化の元は国文研に。

高度な教養を要する江戸文化。漫画だなんてあなどれない!



先生、夏の子供見学デーでお目にかかりましたね。

山下 あの前大会は国文研の市民貢献事業の一つとして提案したものです。定時制高校の教員を十六年やり、常に興味を持たせることを意識してきました。そこでこの百人一首はとても人気だったので、ここでもカルタ取りを提案したのです。

先生のご専門は百人一首ではないですよね?

山下 最初は草双紙が専門だったんです。まあ、漫画の先祖みたいなものです。こういう風に絵と文が一緒になっている本です。

——本当に漫画みたいじゃないですか!

山下 これはこの冊子のコレクターだった子供が色を塗ったものです。三田村彦五郎と言う子ですが、この子についてはある程度研究がされていて、武士の子供でお姉さんと一緒にこういう黒本、青本を集めていて、今で言うまさにコレクターですから、とても綺麗に保存してあるのです。——三田村君はアニヲタなわけですね(笑)。これは何のお話なんですか?

山下 『伊勢物語』です。青本といいます。もともと青かったのが、草花の染料だから色が飛んじやって黄色っぽくなっていますが、青本。他に赤本もあります。

——赤本とか青本とかの違いって何なんですか?

山下 時代的な差、つまり赤本が最初で次に黒本ができて、青本と黒本と一緒に出ていた時代があって、その後が黄表紙といって完全に大人向けのコミックみたいな、大人向け漫画になってしまったのですね。

——先生のご専門はこの漫画の先祖……?

山下 でした。研究は続けていますが、『草双紙事典』という本を共著で出して一応集大成しました。この黒本、青本の絵は浮世絵師がアルバイトで描いていたのです。それで浮世絵の勉強もしようと思い、当時一番の娯楽は歌舞伎や浄瑠璃で、それが黒本にも出てくるので歌舞伎の勉強もしてとやっていたうちに、やっぱり浮世絵の方が華やかなのでそこからそっちへかなり移行してしまいました。この浮世絵の人物の衣裳は正面摺りで光るように摺られていて、顔から市川海老蔵の祖先の人だとわかります。

「擬五行尽之内 王位を望む木 大伴黒主」と書いてあって、王位という権力を望む気持ちと五行「木火土金水」の「木」とを掛けているんです。なぜなら五行の「木」になぞらえられているのは大伴黒主という人で、『積恋雪関扉』に登場します。黒主は六歌仙の中にも入っていますが、なぜか悪人ということになっています。背景は雪景色。その中に桜が咲いている。これは木こりに化した黒主の正体を知る小町桜の精霊が現れて大伴黒主と戦うという、小町桜の木がポイントの作品なのです。

——難しい!

山下 でも面白いでしょ? しかも似顔絵になっていて、ほら、目が大きい。これは七代目市川團十郎が五代目市川海老蔵という名になった時で、この大伴黒主は彼の当り役でした。衣裳には牡丹立涌。実は牡丹は市川家の替え紋。「寿の字海老」はもちろん市川團十郎の模様です。

——広告みたい!

山下 ね! 情報満載なだけに全部わかるようにするには勉強することがたくさん。でも好きだったら大変じゃない

山下 いや、だけどね、私たちは色々他の知識があって古典はその一部だけど、当時の人々は古典や歌舞伎とかがその知識のほとんどだから、みんなだいたい知っているわけですよ。

——そうか!

山下 だからそんなに引け目に感じることもないけれど、威張れることでもない。というのは今、国文学は日本の中では下火になってしまっていて、本当に憂えています。

理科系に比べればお金もかからないし、これだけ豊かな文化が土壌にあって、それに触れれば日本を深く知ることができ、心が豊かになって満ち足りた気持ちになるのに。本当にもったいないです。海外の学生の方がむしろ興味を持ってくれます。

——国文学を専攻すると就職しにくいと言われているようですが、日本を知ることとは大事なことですよね。

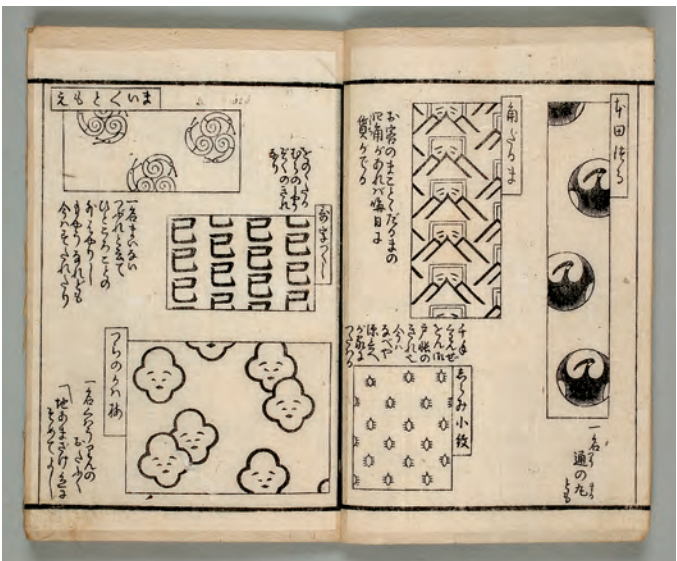
山下 江戸時代庶民の文化の高さはとても有名です。出版文化が整っていたし、みんな字が読めるわけですしね。結局は三百年の平和がもたらしたものです。そしてどうしてこれほど戯作などの遊びの文化が発達したのかというと、儒教道徳が行き渡っていて枠組みがきちりした社会で、護るべきことがはっきりしていたために、その中で遊べる。遊びの精神を育んだ土壌はそれだったのではないかと思いますね。

——根っこがぶれないから、遊べるんですね。

山下 一枚の浮世絵を創るにも、描く人と彫る人と摺る人とがいるわけです。描く人はともかくも、彫る人や摺る人は安い工賃で、名前もあまり残らない。でもすごい仕事でしょ? 「見当」という簡単な印でまったく狂いなく重ねて摺っている。

——すごいですね。

山下 それが今、世界の最先端を支える日本の職人の技術になっていくのですよね。——先ほどの本には何が載っているのですか?



山下 これは山東京伝という人が作って描いた『小紋雅話』という作品ですが、着物の模様集に見立てたもの。これは「本田つる」。日航のマークみたいでしょ? 実はちゃんまげを上から見ている。

——ホントだ(笑)。

山下 昔の粋な通人は、マゲを真つすぐじゃなくて、こうして曲げていた、しかも細く。こちらは「しらみ小紋」。

——シラミの形してる……

山下 こちらは「まいまいともえ」。

——カタツムリですね。

山下 カタツムリなのだけど、この頃田沼政治が崩壊した直後で、まいまい(賄)という裏のお金を茶化してる。

可愛いし、楽しいけれど注釈をつけるのが大変(笑)。当時の風俗も知らなければならぬ。こうした高級な遊びの本が「見立て絵本」です。

——今まで全然こういうもの知りませんでした。

山下 特に「見立て絵本」はちゃんと解釈するには相当勉強しないとできません。これは江戸時代中期のものです。昨年初の国文研連続講演で中野三敏先生は、中期のものは一番水準が高いと「ひとこぶラクダ説」を唱えています。今までは初期の元禄と後期に頂点のある「ふたこぶラクダ説」だったけれども、と……。でもそのような作品が教科書に載ったこともないし、ほとんど手付かず状態です。

先生、これからはどんな研究をなさっていくのですか?

山下 平成二十二年から二十四年までで、「見立て・やつし」のプロジェクトを継続発展させたような(近世的表現様式と知の越境)というプロジェクトをやっている、その活動の一年目です。今度は「教訓」とか「評判」とかもやります。役者の評判はもちろん、遊女の評判、学者の評判、食べ物の評判、お菓子の評判。

——面白そう! 次も楽しみにしています。



御伽草子を深く読む

国文学研究資料館

准教授 齋藤 真麻理^{まお}さん

「一寸法師」に「ものぐさ太郎」、「おむすびころりん」

どこかで聞いたような、読んだような話の中に、

人々の暮らしと夢が息づいている。

——先生のご専門は？

齋藤 室町から江戸にかけての説話研究です。博士課程に入った頃は、室町末に作られたお経の注釈書を勉強していました。面白い話や和歌、ことわざ、御伽草子とそっくりの話などが載っていて、興味を持ちました。御伽草子も室町から江戸にかけて作られたもので、「一寸法師」ものぐさ太郎」なども御伽草子です。たいてい綺麗な挿絵があり、絵と一緒に楽しめていました。そこでいくつかの作品を読んでいるうちに、観音信仰が反映されている挿絵に出会ったのですが、本文にはそんなことは書かれていない。その時、本文だけでなく、「挿絵を読む」楽しさを知り、御伽草子も勉強するようになりました。

——今日ご紹介くださるのは……

齋藤 「在米絵入り本の総合研究」という共同研究についてです。今年度から本格的にスタートして、三年計画で進めています。

——在米ですから、アメリカにある日本の絵入り本ですよね？

は、庶民が活躍して富貴繁盛、めでたしめでたし、で終わる物語がたくさん作られました。庶民の夢を語ったのかも知れませんね。また、人間以外のものが活躍する作品も、私は好きです。動物や植物、道具が擬人化され、人間顔負けの歌合をしたり、恋をしたり、見ているだけで楽しくなります。その上、実は『源氏物語』を踏まえているなど、作者の教養が隠れていたりする。当時の学芸、教養が盛りこまれ、知的な遊びに満ちているところに、魅力を感じます。

——調べるのは大変そうですね。

齋藤 謎解きみたいで楽しいですよ。古典というのは何か特別なものではなくて、何世代か前の人達が、実際に楽しんでいたものです。現代まで受け継いでいる部分もあれば、意味が分からなくなったり、失われたりした部分もある。ですが、自分たちの足元を知るの面白だし、大事なことでないかと思っています。

——例えば？

齋藤 スペンサー・コレクションでいうと、この『鼠草紙出世物語』。これはめでたづくしの話で、都の白鼠が美人鼠と結婚、一度は生き別れになりますが、人間に助けられて帰京し、人間も白鼠から福を授かります。挿絵は白鼠ばかりです。ところで今はお正月に書き初めしますが、昔は「読み初め」という風習もあって、新しい年が幸せであるようにと、おめでたい物語を読んでいた。この白鼠の話も読み初めの物語だったようです。

白鼠は大黒の使者で、福を授けるめでたい動物と考えら

齋藤 はい。主にアメリカ東海岸の図書館などが対象です。最初に調査を始めたのは、ニューヨーク・パブリック・ライブラリーという図書館です。ここは寄付に基づいて運営されています。人々に開かれている、という意味でのパブリック＝公共図書館なんですね。

——いかにもアメリカらしいですね。

齋藤 ええ。その「スペンサー・コレクション」という特別コレクションを調査しています。このコレクションには悲劇的ないきさつがあって、明治の頃、いろいろな絵入り本を集めていた、ウィリアム・オーガスタス・スペンサーさんというコレクターがいらしたんですね。日本の絵巻や絵本も持っておられましたが、一九二二年、あのタイタニック号に乗っていて、亡くなりました。四十代だったそうです。その後、一九二七年に奥様が蔵書と基金を図書館に寄贈なさった。図書館側もさらに本を購入し、現在の蔵書は六百点を超えています。日本の絵入り本の一大コレクションとして有名です。

——それを外国の方も含めていろいろな方と一緒に研究す



れていたんですね。昔話「おむすびころりん」でも、主人公は鼠から宝物をもらいます。そして、こうした信仰は少し前まで生きていた。近代の作家、中勘助の書いた『銀の匙』には、白鼠を「お福様」と呼んで大事に飼っていた人の話が出てきます。こうした信仰は、もうあまり残っていませんけれど。

——そうですね……。描かれたものだけを眺めたのではなかったようでわからない。

齋藤 はい。その話の何が面白かったのか、その時代は何を大事にしていたのか、知っているつもりで通り過ぎてしまつと、見逃すものが多い気がします。

——なるほど、その具体的な例もあげただけですか？

齋藤 では、今日はちょうど、本物の御伽草子絵巻をご覧頂こうと思っていたので、その話をしましょうか。これは国文研の貴重書の『大黒舞』という絵巻です。庶民が幸福になる話で、昔話「わらしべ長者」と似ています。奈良吉野の里に住む男が、何とか裕福になって親孝行をしたいと、清水の観音にお祈りする。そうしたら、わらしべを授かる。帰り道、「ありの実売り」に会う。「ありの実」は梨のことで、「無し」に通じるのを避けた言い方です。この人が鼻血を出している。それで、わらしべをありの実売りにあげるん

るわけですね？

齋藤 そうですね。挿絵も研究対象としますから、やつぱり文学だけでなく足りない。美術史だけでも足りない。ですから、文学、美術史、歴史、民俗学、その辺りをお互いに……。

——補い合って……。

齋藤 ええ。数人のチームを組んでは、スペンサー・コレクションやメトロポリタン美術館、ボストン美術館、シカゴ美術館などに伺っています。素晴らしい絵入り本をお持ちのコレクターもいらつしますが、どこに何があるか、完全には分かっていません。まずは基礎的な調査をもとに研究を進めて、成果は一般の方にも分かりやすくまとめ、出版する予定です。

——先生はここでも御伽草子を研究されているんですか？

齋藤 そうですね。御伽草子はさまざまな主人公が登場しますが、特徴的なのは庶民物。庶民が主人公の物語は、それまでは余り例がないですよ。でも、御伽草子の時代に

です。つていうのは、当時の俗信では、小指をしばると鼻血が止まる……（笑）。
——鼻の穴に入れるんじゃないんだ（笑）。
齋藤 違います（笑）。こんな俗信が入っているのがまた面白いのですが、とんとん拍子に豊かになって親孝行していると、大黒天が来て、隠れ蓑や打ち出の小槌などのお宝をくれる。挿絵では、大黒のお供は白鼠でしょう？

さて、その日は節分で、誰かが荒々しく戸を叩く。すると、大黒天が「あれは鬼だ」つてささやくんです。そこで豆まきの方法を教わって撃退するのですが、「ささやく」という行為はちょっと大事なのです。現代の「ささやく」は、人に聞かれたら困ることをヒソヒソ話す、という感じですよ。ですが、かつて「ささやく」は神仏の託宣と結びついていた。古典作品の中でも、祝詞をあげたり、神仏がお告げを下す時「神仏と人とが言葉

を交わす時」は、ささやく場合が多い。今の「ささやく」とは違うのだけれど、この言葉は今でも使うから、意味を知っているつもりでいると、読み飛ばしてしまう。この大黒天のささやく、本来は神仏のささやく、お告げのイメージがあったらうと思います。

——へー。そうだったんですね……。

齋藤 御伽草子には、その名も『ささやく竹』という作品があって、国文研も所蔵しています。昔話「牛になった花嫁」や落語「お玉牛」と近い話です。美しい娘に恋した老僧が、本尊のふりをして偽のお告げをささやく、失敗してしまうのだけれど、この挿絵、立派な身なりの僧侶が仏間からささやいているでしょう？ 僧侶の罪深さを強調する表現になっているんですね。でも、他の図書館が所蔵している『ささやく竹』では仏間ではなく、僧侶も簡素な姿で描かれています。つまり、テキストによって挿絵が違ふ、物語世界が違うのです。ですから、やはりまずは地道な調査が必要です。そこから本格的な作品研究が始められるわけです。

ちなみに、国文研の御伽草子絵巻や絵本は、全文をカラー画像で公開していますので、是非、絵入り本の世界をのぞいてみて下さい。

「※国文研ホームページ 新奈良絵本データベースをご覧ください」

普遍性は時を越える 能の魅力

国文学研究資料館 研究部

教授（研究主幹） 小林健二さん

立川にはすごい人がいるもんだと今月もまた思う。

現代人には「辛気くさい」と敬遠されがちな能。

ところがこの先生の話を聞いた後は、なぜか観たくてたまらない！

始めから研究者になろうと思っていた訳ではありません。高校生の頃出会った国語の先生が面白くて。古典になると一段と話が熱を帯びてくる。私の古典好きはこの先生

の影響が大局です。高校の古典教材にはよく「平家物語」が使われますが、私の学校では木曾最期を読みました。最後の最後まで付き従って、なんとか主人に見事な最期を遂げさせて、己も死のうと奮戦する今井四郎兼平の姿に、まあ、グッときたわけです。負け戦だとわかっていても主人の為に尽くす……。ああ、こういう人もいるんだ。こんな風になりたいな、と感情移入してしまったわけですね。これが古典を面白いなと思った始まりで、国語の先生になろうと国学院大学に進みました。

大学二年の時、中世文学の講義と言えば普通は「徒然草」とか「方丈記」「平家物語」や「御伽草子」を読みますが、私の場合はそれが能だったんです。珍しい例だと思えますね。先生宛に来る招待券をいただいたて、初めて能楽堂へ能を観に行きました。忘れもしない、今は人間国宝の宝生流能楽師、三川泉さんがシテ。今から三十五年くらい前ですから、三川さんもまだ若くてね。演目は秋の名曲「三



ヨォー、ヨォー」と気合いを込めてかけ声をかける。そして、美しい装束、それに能面。いろいろな種類の面があつて、しかもそれらは完成された美を持っている。そんなところに引き込まれ、魅せられていきましたね。

能のレパートリーは現在二百番くらいあるのですが、その中でも頻繁に演じられるのは百番くらい。観れば観るほど新しい発見がありました。ある時「あつ、これは！」という舞台に当たった。その観能体験はとても不思議なもので、言葉では言い表せません。

決定的だった一番。それが金剛流の奥野達也さんの「隅田川※」でした。「隅田川」というのは生き別れになった母子の物語です。一曲終わって、私はあまりの余韻にしばらく席を立てなかった。今まで味わったことのない感動でした。「平家物語」の血沸き肉踊る思いでもなく、小説を読んだ時のようなワクワク感やジーンとくる思いでもなく、言葉では言い表しにくい感動なんです。そのまま冷たい世界に落とされるというか、どっぷり沈んで行くような感じでした。

能は今から六百年前に作られた芸能です。観阿弥とその息子の世阿弥が能楽を大成したと言われています。芸能や演劇はその時の流行に左右されるもので、今流行っている芸能が今後もずっと残るかと言え、それは極めて難しい。文字テキストとして固定した「源氏物語」ならわかりますが、芸能はその場だけのもの。それが生命力をもって六百年も残り続けるというのはすごいことです。

人に訴えかける力というのは二つあると思います。一つは時代性、当代性とも言います。その時代に受けるということです。芸能や演劇はその要素がとても大きい。分かり易く言えば、今はAKB48が流行っていますが、少し前はモーニング娘、さらに以前はおニャン子クラブだったりと流行は移り変わる。ところが、能や歌舞伎は現代でも演じられているし、シェイクスピアの戯曲などは日本で日本語でも演じられている。それはなぜかと言え、普遍性があるからだだと思います。時代性も大事ですが、普遍的な魅力があれば六百年でも続くということです。

では能のすべてが演じ続けられているかと言うとそうではない。レパートリー二百番のうち頻繁に演じられるのは百番ぐらいで、その中でも人気の高いものは五十番くらい。そのほとんどが観阿弥と世阿弥の父子、世阿弥の息子の観

世十郎元雅とか、世阿弥の能や能楽論の実質的な継承者である金春禪竹などの作品です。世阿弥が完成させたものは普遍的な魅力をもっている。普遍的な魅力とは、やはり人間の喜怒哀楽を表現していることです。それを古典文学の世界を使いながら、うまく再構成しているんですね。人間が生きていくには一人では生きていけない。必ず社会の中で、人間関係の中で生きていかなきゃいけない。そこで色々な葛藤が生まれたり、喜びが生まれたりする。つまり喜怒哀楽です。「源氏物語」にはそれらが表現されているのではないかと思います。だから大ベストセラーになる。軍記物語でもそう。「平家物語」の木曾最期に描き出されているのは、乳母兄弟の絆といいますが、木曾義仲と今井四郎兼平の「死ぬ時は一緒」という強い絆、そんな人間の機微が描かれている。

以前は高級な趣味として能を支えるパトロンがいましたが、今は観客層が変わってきて、純粋に演劇として面白いなどと思つて入ってくる人や、狂言人気から能に興味を持つ人などが増えてきました。私は国立能楽堂の専門委員をしていますのでわりとよく観に行きますが、年配の方ばかりでなく、今は若い方もだいぶ増えてきました。でもやはり観客の割合としては、謡や仕舞のお稽古をしていた人が圧倒的に多かったものですから、そうした人が減ってくるだけ観客の絶対数は減っています。

歌舞伎のように一定期間毎日演じる興行とは違い、能は



井寺」でした。

いや、私の初めての観能体験は散々なものでした。開始十五分でもう帰りたくて帰りたくて。でも周りは熱心に観ているんです。謡の本かなんか見たりして。真ん中の席でしたから「すみません」なんて抜け出すわけにもいかないし。結局最後までつきあつて、観終わったときの印象は、「世の中には不思議なものがあるな」というものでしたね。先生から「どうだった？」と聞かれて正直に答えました。「誰も帰らないのが不思議だった。でもみんなが一生懸命観ている」ということは、今の自分にはわからないけれど何か魅力があるのかもしれない」と……。それが能との長い付き合いの始まりでした。

能は現代の演劇とは全く違う。謡と台詞とでものごくゆっくりと進行する。どちらかといえば我々に、その物語を想像させていくような展開のしかたが珍しい。音楽も変わっている。囃子の楽器は小鼓と大鼓、それに笛が基本で、そこに太鼓が入る。今まで経験したことのない音に、「い

本当に一期一会。一つの舞台をやるために、能役者は何日も前からその舞台の準備をして、謡を一生懸命覚える。師匠に舞台の動きを教えてもらつて能面を選び、その曲に合う装束を選んで、稽古を積んで前日に申し合わせという、本番の舞台の動きと同じ予行演習をやつて当日に臨む。そして本番はその日一回しか演じない。一回しかやらないのが能の能たところなんです。そんな緊張の中で演じますから、観客も緊張を強いられる。感受性の豊かな若いうちにこうした雰囲気味わうと、能の魅力にハマると思いますね。もちろん、歳を重ねてから余裕を持つて観るのもよいですが。

隅田川もいいのですが、『井筒※』も観てもらいたい。男女の愛という普遍的なテーマを扱った能で、在原業平に対するシテの純愛が描かれています。シテは待つ女です。待つという受け身のようなのですが、待てるということは強いことなんです。我々はその強さに引かれるんですね。シテは業平を思つて舞うのですが、段々と思慕が募つて、二人にとつて想い出の井戸、将来を誓い合った井戸の中を覗き込む。ここがすごくいい場面なんです。役者が覗き込む瞬間に、囃子方も謡も、一時止まるんです。二、三秒、もつとかな、止まつて、そして、顔を上げて「みれば懐かしや」と謡う。その一時を私は「永遠の一瞬」と言っています。全ての時間が止まるという感じなんです。観世寿夫さんという名人が演じたその場面は本当に素晴らしい。甥の観世鏡之丞さんによれば、「伯父は『あの一瞬は全ての内臓の動きを止める』と言われた」とのこと。

井戸の中に女が見たのは何か……。映っていたのは自分ではなくて愛する業平の面影だったのか。この世阿弥の問いかけに、私は愛の永遠性のようなものを感じるんです。そして、業平のことを思つて舞っているうちに夜が白々と明けて、残ったのは在原寺に吹く松風だけであつた……。普遍性を感じませんか。

私は大学の教員だったとき、学生が能に対して少しでも興味を持てるように努力してきましたが、今でも講座などを通して一般の方に分かり易くその魅力を伝えることが大切だと思っています。

〔※あらすじが次ページにあります〕



『隅田川』

始めに物狂の女が出てきます。これがシテ、この能の主人公です。物狂とは狂人という意味ではなく、芸能者のこと。自分は都の北白川の者で夫とは死に別れ、たった一人の子供は商人に誘拐されて東国に連れていかれてしまった。そこで物狂となって我が子を探し求めているのだと語ります。

隅田川まで来ると、渡し船の船頭が、面白い芸をすれば船に乗せてやると言う。あたりはまさに春爛漫の気色、そこで「伊勢物語」を背景とした謡舞いを見せて、女は乗船を許されます。

渡河の途中、船頭はちょうど一年前に都から商人に連れて来られた子供が、向こう岸で亡くなってしまったことを語ります。女はジッと動きませんが、聞き入っていることが観客にはよくわかる。そして「子供の名前は梅若丸、父は吉田のなにがし」と語られると、それまでほとんど動かなかった女の面が少しだけ動く。我が子のことではないかと気づいたことを微妙な動きで表すのです。更に聞いているうちに、女はそれが我が子であると確信を持ちます。

やがて船は対岸に着きます。ところが女は降りない。訳を聞けば、「それは我が子のことだ」と悲しみにくれます。大げさに泣いたりせず、指を揃えた手を額のあたりに持つてくる「シオリ」という、涙を抑える仕草をします。さりげないけど、全身に悲しみを帯びているように見える。能というのは身体の動きを抑制して、喜怒

哀楽を表現する劇なのです。

船頭は女を墓である塚へ連れて行く。ここで女は唯一アクションを起こします。「墓を掘り起こして、今一度我が子の姿を私に見せてくれ」と訴えて塚に近寄り、掘り起こす真似を見せる。抑制された中でこの動きは観客に強いインパクトを与えます。「悲しんばかりでは子供の霊が浮かばれないから」と船頭に促され、女は念仏を唱えます。すると子供の声で「南無阿弥陀仏」と聞こえてくる。さらに女が唱えると、子供が幽霊の姿となって現れる。二人は見つめ合い、女は我が子をかき抱こうとするが幽霊なのでスッと避けられ、ガクツと膝をついてしまう。やがて夜が白々と明け、我が子と見ていたのは塚の上の草木であった……と終曲を迎えます。

『井筒』

屈指の名曲と言われる世阿弥の作品で、男女の愛という普遍的なテーマを扱ったものです。諸国一見の僧が、大和の国の名所である長谷寺へと向かい、その途中に在原寺に立ち寄ります。在原寺は廃寺となって荒れ果てていますが、ワキの僧が、ここは昔、在原業平と紀有常の娘が契りをこめた場所だったと思いにふけっていると、美しい女が忽然と現れる。これが主人公、シテです。この設定がもう「能」なんです。全くの廃墟の夜更けに、美しい女性が手向けの花

を持つて突然登場する。実はこの女は幽霊なんです。こんな時間に女性が一人で現れるには何か理由があるのだろうと、僧は女と会話をします。話をしていくうちに、昔ここは業平と有常の娘が契りを結び、その後二人は夫婦になったのだけれど、業平には龍田山を越えた河内の国に愛人が出来て通うようになったと女は語る。古い話をよくご存知ですねという僧に、実は自分が業平の妻だった紀有常の娘なのだと素性を明かし、「伊勢物語」の「筒井筒」の段、「つついづついづつにかけしまろがたけ」と歌われたあの幼馴染みで、龍田越えをする業平を一途に待ったのも私だ。だから自分は「筒井筒の女」とも言われたのだと語って、消えていきます。ここまでは前場になります。

後場では、シテである紀有常の娘は業平の形見の衣を着て、烏帽子をかぶって出てきます。そして業平と契っていた頃のことを語るのですが、その内容はひたすら男を待ち続けた「人待つ女」の純愛の物語です。待つ女ですが、決して受動的ではない。待てるということはとても強いことなのです。物語っているうちに業平への思慕はいよいよ強くなり、二人にとって想い出の井戸を覗きます。そしてすべてが止まる永遠の一瞬。「見れば懐かしや」と謡うが、いったい何が見えたのか……。自分の姿なのか、それとも業平の面影なのか……。業平のことを想って舞っているうちに夜は白々と明けて、残ったのは在原寺に吹く松風ばかりであった、という終曲を迎えます。

過去に学んで 今を生き、未来を拓く

国文学研究資料館 研究部

助教 加藤聖文 さん

国文研には歴史の先生もいると聞いた。
証券マンから転身。未来のために今を残し続けている。



写真：立川市歴史民俗資料館

——先生のご専門は近現代史でしょうか？

加藤 僕は日本近現代史の専門で、この資料館では近現代の資料を扱っています。僕が今関心を持っているのは、戦中から戦後にかけての資料です。古文書などはお宝のようになってきていて、捨てる人はあまりいない。しかし戦後の記録は、軽視されがちです。これから五十年、百年先には立派な歴史資料になるものです。これを保存しておかないと僕らの後の世代になった時に、あの時代を検証できなくなってしまう。素材を残しておけば、後々なにかの研究に使ってもらえるのではないのでしょうか。ごく普通の一般庶民が記し残したもの——日記、学校時代のアルバム、卒業証書。誰もが持っているのに、その価値は個人的なものだと捨てられてしまうことが多い。後の時代から見るとその時代を知る手がかりになる大切な素材なんです。名も無き人々の記録は、今意識して残さなければ無くなってしまいます。

——その中でも特に満州関連に興味を持っていらっしゃるとか。

加藤 僕の研究テーマが日本と満州の関係ですので、満州

満州には日本の様々な地方から人が集まっていますので、本当はお国なまりがあるはずなんです。けれど実際には標準語でしゃべっていた。引き揚げてきて、それぞれまづは本籍地である田舎に帰りますよね。満州で生まれ育った子供なんかは、地元のことば^{方言}がわからない。自分は標準語をしゃべる。引き揚げ者の共通する点は、だいた言葉が原因でいじめられるということです。生死を彷徨^{さまよ}う引き揚げ体験をして、ようやく日本に帰ってきて最初の関門が「言葉」なんです。でもそういうことは、こちらがインタビューして掘り起こしていかないとわからないことです。

——引き揚げて来られた方も、自分個人の体験としか思っていないんですね。

加藤 そうなんです。個人的体験が歴史的に価値あるものかどうかわからない。こちらでお話を集めていくと、ある種共通のものがわかってくる。あの時代の雰囲気というのが見えてくるんです。こういうことは意識的に残していないとしないと残らないですよ。

——先生のお仕事は、過去を残しているようで未来を見ているんですね。

加藤 そうですね。歴史資料というのは未来にどうつながて行くかを考えないといけない。未来の人たちがどう活用していくか。再活用されることで記録は生きてきます。

——先月号で登場頂いた京都の酒屋さんですが、「酒屋は過去を歴史にしてしまわない」とおっしゃったんです。

や朝鮮半島にいらした方が引き揚げてきた時に命からがら持ち帰ったものとか、帰国してから書き残したものとかに興味があります。戦後六十五年も経って殆ど風化しかかっている記憶ですが、人間はある種強烈な体験をした時には、何か記録を残しておきたいと思うようです。今の時代になり、代替わりして遺品を整理していたらこんなものが出てきた。捨てるのも惜しいし、どうしたらいいだろうというケースが最近多いんです。僕はこうした資料を集めている適切な所を紹介したり、またはここで保管したり、その目録を作ってどうやって公開するかを考えたりしています。

——先生がお話するといっぱい集まってきましたそうですね。

加藤 講演会などで話すといっぱい話がきますが、これは社会的使命として応えなければならぬことだと思っています。その際、資料の価値判断はこちらでは絶対にしていない。価値判断はお宝の値段をつけるのと同じ。我々は鑑定士ではないので、平等に誰の作った資料でも整理して保管していきます。記録としての価値はすべて同じなので。ただ資料の形態が様々で、技術的にその分類が大変ですね。ノートや写真、着ていた服とか帽子、同窓会誌。でも全部受

加藤 うん。歴史ってそういう意味では罪深いところがあって、資料館

などを作った段階でも一旦終わってしまおう。その事実を伝えたいと思つて作つても、作つた段階で終わつて。歴史家としてはそこがある種非常に難しい。いかにして今の時代の人に共鳴してもらうか、生かしていくか。

——酒屋さんは、時代に合わせて変わりがら、変えてはならないところは変えない、と。でもすごくむずかしいって……。



加藤 むずかしいです。どこか線を外れてはいけない所があつて、かといつて時代のニーズにに応じていかなければならない。あんまり応え過ぎてしまつて迎合になつてしまつて。最近マンガにもゲームにも歴史がテーマになつていたり。時には歴史がわからなくなるようなことも（笑）。

加藤 こわいですよ（笑）。戦国武将もキャラクター化されて。それもいいんですけど、やりすぎてしまつと本当に歴史を見る目というのが……。

——でもそれで歴史が増えたんですよ（笑）。

加藤 そうですが（笑）。博物館にお客さんが入るという効果はあつたかもしれない。誰々が好きという歴史入門もいいのですが、あくまでそれはフィクションであつて。やりすぎるとその当時の歴史を知つたことにはならないんです。

——歴史を知ることの重要性とは？

加藤 歴史は人間がやっていることです。人間の本質というものに関わってきます。今の時代で自分がどう生きるかという時に、ひとつの参考というか手引きになると思います。そのために歴史はある。過去の人とうやつて同じ目線で対話できるか。過去の価値観とか雰囲気とかをできるだけ理解していないとその人の目線にはなれない。現代の目線、今の価値観で見てもと豊臣秀吉だって徳川家康だって、どこまでいったつて平行線ですよ。彼らが生きた時代の目線でみて、あの時代は一体何だったのか、あの時代の中で彼はどうしてこういう判断をしたのか、なぜこんな生き方をしたのかと考えていけば、それなりの人間の苦悩やある種人間の弱さが見えてくる。人間は完璧で

はない、ある種宙ぶらりんな存在だということ。前提に考えると、今自分が生きている中で、の非常にいい参考になっていくと思うんです。

——個々の人間だけでなく、国もそうですね。

加藤 国と国との関係も、人間と人間の関係と本質的には同じ。思い違いがあるとか感情的なすれ違いがあるとか、非常にばかばかしい部分でわかりあえず、結果的にものすごく関係が悪くなって最後に戦争になる。望まなくても戦争は起こってしまうし、そういうケースの方が圧倒的に多いです。

僕が歴史家になつたきっかけはソビエトの崩壊です。あんな超大国があつてなく、しかも戦争もなく崩れてしまった。人間がやっているのに、結果的に人知を越えた予測不可能な方向に向いて、最後はあつというまに潰れてしまった。国家とはいかにしろいか、人間の力にはいかに限界があるかということを思い知つたわけです。今回の原発なんかもそうですが、全部が維持できるとか、すべてを支配できるという事態がそもそも間違ひであつて、何かのきっかけで誤つた対策を続けていくとあつというまに崩れてしまう。ソビエトは僕にとって衝撃でした。

——歴史を知らない未来は見えないとよく言われますよね。

加藤 ええ。戦争なども、どこが侵略したとかいうことよりも、単純には言い切れない、曖昧な部分が非常に重要なんじゃないかと思ひます。正しいと思つて対応していたけれど、実は全然正しくなかった。でもやっている人に悪意はない。結局人間は未来が見えないので、どの道を進めばいいかという選択なんですね。いいと思つて選んだ道を進んだら谷底に落ちちゃった。そんなことの繰り返しじゃないかと。そうなる前に過去の事例に学んでいかないと未来が見えてこないです。

今の日本が迷走していると言われるのは、戦後のある時期で過去について冷たくなったからのような気がします。それはもう終わったことでしょ？ 今が大事、と。価値観がお金になって、経済的効果、効率化、合理化が優先され、過去を軽視した結果が今に繋がっているのではないでしようか。



加藤聖文さん：平成29年3月末現在 准教授

命をかける娯楽

芸能「歌舞伎」

国文学研究資料館

副館長 武井協三 さん

京都三大美少年の一人。

長じて初期の歌舞伎の専門家に。

「見ぬ世の人を友に」して得た話は、深い。

武井 昭和三十年代後半にね、京都に三大美少年ちゅうのがおったんですよ。ひとりはこの前、龍馬伝で山内容堂をやった近藤正臣。もうひとりが沢田研二、ジュリー。で、

もうひとりとは、私ね。

——誰がそう言ってたんですか(笑)？

武井 みんな言うてました。

——そうですか(笑)。ずっと京都でいらつしやいますか？

武井 男前の話の次は京都の話しましょか。京都の生まれ育ちで、大学は早稲田やけど、関西弁をずっと使ってるんですよ。国文学研究資料館の共通言語は関西弁でなければいかんと思ってるんです。だってね、枕草子。清少納言っていう人はずっと京都の御所に居た人ですよ。そしたら「春はあけぼの」という響きで文章を書いたわけではなくて、「春はあけぼのや」と書かあったわけですよ。源氏物語だってそうだし、徒然草だってそう。江戸の真ん中あたりまで、文化の中心は上方です。ですから関西弁の響きっていうのは、古典文学の中で非常に大事なはずなんです。まあ、そういう言葉を大事にしていこうという意図があるんやな(笑)。

——反論はないんですか？

武井 反論、聞いたことないね。そう言われてみたらその

——三大美少年のおひとりだとすると(笑)、先生は相当もてたわけですね？

武井 めちゃめちゃもてました。

——ご専門の歌舞伎などは、もてるって大事なことでしょね？

武井 そう、華のある役者が人気を得る。そういう側面はやっぱり大事なんです。真面目に修行して台詞のしゃべり方だとか、体の動かし方を一所懸命努力した役者、それはそれで尊いんだけど、それだけではどうしても人気役者にはなれない。持って生れた存在感というのが必要なんです。五代目の団十郎と言う人がいてね、この人はへたくそやった。稽古の工夫をいくらやってもしょうがない、そんなことばかりやってたら身が持たんという言葉を残してるんですよ。自分が舞台に出ただけで、観客がワーツと喜ぶ様な役者になりたい。存在している人間のそのめでたさ、そういうものを体現する存在でありたいと言ってるんです。その五代目団十郎が江戸でものすごい人気を得ただけども、これは江戸に疫病が流行った時期で、江戸の人口が百万ぐらいたと言われている時、二十万人ぐらいが死んでる。二十万人も死んで、どこ家族でも一人ぐらいやられている。そういう時期に劇場へ行つて、ずっと何代も続いてきた団十郎の演技を見る。荒事って言うんだけど、大きい所作でもって、見得をして、それはまるでそこに太陽があるような演技です。温かい太陽がある様な、そういうものを観て、江戸の人達は安心するわけです。「ああ、ここに変わらないものがあつた」と。それは上手いか下手とか、そんな事を越える「存在感」なんですよ。——なるほど。

武井 今回の震災を通してね、我々のような文化や文学の研究者に一体何ができるんだろうと、非常に無力感におちいることがあるんだけど、こういう時期が一定期間過ぎた時に人間が何を求めるか。もちろん食べて命を生きながらえる事が一番大事なんです。だけれどもそれができるようになった時、豊かに生きたいと。飯もおかずもドングリにほりこんで一緒にして食ってたのが、きれいに盛り付けしたものを食べたいと思う。美しい盛り付けのその美しさの部分に文学だとか文化だとかそういうものがある。

——私が歌舞伎を観に行く楽しみは、お弁当でした(笑)。武井 うん、うん。それで良いんです。歌舞伎の楽しさっ

て言うのは、飯食う楽しさや。大名の屋敷なんかで歌舞伎を呼んだりすると、その記録は半分が飲み食いの記録ですよ。お菓子は何か出たとかね。そういうものを食いながら観るのが芸能です。相撲でも演劇でも、普段は真面目に働いてる人達がちよっと「外れる」楽しみて言うものを彼らは提供してきたんです。芸能、歌舞伎っていうのは飲み食いをして楽しむのが本来の姿。歌舞伎に「かべす」っていう言葉がある。菓子、弁当、寿司って言うこと。歌舞伎の楽しみの大きな部分は「かべす」。それから着飾る楽しみね。一張羅着て。

——歌舞伎の「研究」とかって言うから、だんだん勉強みたになっちゃうんじゃないですか？

武井 うん、そう。だから、それは研究者がそういう事をちゃんと教えないと駄目ですね、大学の講義なんかで。本来芸能とはこういうものだということを。源氏物語だって本来楽しむものなんで、日本の古典もほとんどのものは娯楽の為のものです。娯楽って言うとか低い位置にあるみたいに見えるけれども、命をかける娯楽って言うのがある。日本の芸能では、娯楽は「慰み」って言うてます。慰みって言うと、何かお慰みごとっていう感じで、レベルが低い、位置付けが低いと思われがちだけれど、慰みって言うのは、いつか死ななければならぬ人間が命を洗濯して、新しい命を吹き込むことなんです。簡単に言えば温泉に行くみたいなもんですよ。温泉行つて「ああ、ええ湯やったな」「ああ、ほっこりした」「寿命が延びたわ」って言うでしょ？ きれなんです。能の元



はずや、となるんですね。それぞれの地方の言葉っていうのはね、大事なものだと思うんです。例えば「花」っていう言葉。その言葉でどういうものを思い浮かべるか。英語でフラワーって言えば、彼らはバラを思うかもしれない。東京の言葉で「花」って言うと、ちよっと凛とした感じの美しさ。京都では「花」言うたら、もっとほっとした美しさなんです。『はんなり』っていう言葉が京都にはある。「あんた小さい頃ははんなりしたええお子やったなあ」って言う。それはほっとしてる。おっとりしている。一輪のきつぱりした美しさではなくて、吉野の山の向こうにパーツと咲いている桜の遠景みたいな。我々は言葉っていうのはコミュニケーションの手段と思ってるけれど、それだけじゃなくて、言葉は思考の中心にあるわけです。その言葉で考えている。東京の言葉だけになってしまつと、京都のはんなりした花だとか、そういうイメージを表す言葉がなくなってしまう。それぞれの地域で育ててきた言葉っていうのは、文化の中核にあるものだから大事にしないと。話が真面目になり過ぎてるね(笑)。

——になっている芸能のひとつに「延年」って言うものがある。延年って言うのは年を延ばす、齢を延ばすっていうこと。人間がただ生命を維持してるだけじゃなくて、生き活きと生を送っていくということ。寿命は限られてるわけだけれども、横の振幅でもってそれを豊かにしていく。それが芸能の役割です。芸能の慰み。娯楽の役割。で、これが百年ほど前の歌舞伎の台本。

——すごい虫食ってる……。

武井 きれいに食ってるでしょ？ ある本が見たいと思つて地方の図書館なんかに行く。それで、その本に初めてご対面した時って言うのはね、古い本って言うのは大抵冷たい。触ると冷たいのね。冷たくてしっとり濡れてる感じがある。そういうのに遭った時に、「ああ、百年間、こいつは俺を待ってたんや」と思うのね。それはね、惚れた女に会ってるみたいなんです。

——へえ！色っぽいですね。

武井 百年間じいっと待ち続けてくれた女に、今俺は会っている。

——私はこちらに来るようになって、感じるものがあるんです。本の中に出てくる実在した人、しない人、登場人物とか、古文書に書かれている名前とか。本や資料を見る度に、または資料館の書架を見せて頂くと、その人間の数っていうか、魂の数っていうか、そういうものに圧倒されるんです。生きてるっていうか、その中から呼びかけてくるっていうか。そういうのは感じないですか？ 先生。

武井 それはね、それはあれです。「見ぬ世の人を友とする喜び」って言うんです。これは徒然草に書かれているのね。今は見られない世の人間が立ちあがってくることがある。その瞬間って言うのがやっぱり面白いですよ。

私は「江戸歌舞伎と女たち」って言う本を書いたんだけど、さっき言った五代目団十郎の奥さん、愛人、母親の三人の事を書いたんだけどね。今まで名前も知らなかったんだけど、存在すら研究者も誰も知らなかったんだけど、それをずっと調べていくと、その三人が生きて動き出すのね。こんな事を考えておったんや、こやうってたんやと。面白いですよ。それはもう、快樂ですよ。

「読書空間」 読み手側からの文学研究

国文学研究資料館

副館長 谷川恵一さん

文学研究は内面を深く読むことだけではなかった。

出版物の流通、図書館の設立を通して、

人の心が見えてくる。



——毎回とても面白いのですが、今日はどんなお話でしょう？

谷川 六年かけてみんなで研究してきたものがここで終わって、その研究についてお話するのがいいかと思います。弘前の話なんですけれどね。明治二十年を境にそれ以前と以後に本の流通の変化が見られる。文学の研究というものは従来作家中心だった。作家が何を考えていたのかとかどういう状況でこういったことが書かれたのかとか。そういったアプローチではなく、読み手を主体にした方向性で研究してみたいわけです。本がどんな風に流通していて、読み手側がどんな風に本を読んでいたか。

——古典ではないんですか。

谷川 そうですね。国文研はもとも古典、江戸以前ものを扱うのですが、立川に移転する前に近代の部門ができました。

——前は京都弁でしたが（笑）、先生はどちらのご出身なんですか？

谷川 岐阜の出身で、大学は京都。最初に就職したのが高

知でそこに十二年いました。そして国文研ですね。関東大震災前あたりまでのものが専門です。

——先生は標準語でお話しなさるんですね。

谷川 ずっとこの言葉ですね。土佐弁でもしゃべらなかったなあ。京都弁も。

——では先ほどの、弘前とおっしゃいましたが、具体的にはどのような……

谷川 弘前の青年たちが図書館を作る、その前身のような読書サークルをしていたということですね。全国の図書館、文庫も含めて、訪ねて調査しました。撮影したりしながら調べてみると、その中に意外に明治時代からの本が残っていて、いくつか読書サークル的な簡易図書館を自分たちで作っている。そのひとつに弘前市立図書館の前身があり、よく調べてみると青年たちの読書サークルから始まっているんです。その克明な記録があって、いまだに百年以上前の本が大量に残っていて、図書館の母体をなしている。「自他楽会」と言いますが、ちょっとふざけたような名前をつけて。

にしてそう思いがちですが、違うんです。ないものも結構あるんですよ。

——それが例えば、弘前にあったりするんですね？

谷川 そう。きれいに残されています。当時の青年たちが、新聞などの広告や書評を参考にして、どんな本を買おうかみんなで会議して選択する。江戸時代には弘前には専門の本屋はまだないんですが、明治半ばになって初めて本だけを売る店ができるので、そこから本を買っています。明治三十年代には、東京土産として東京で出版された新刊本を持って帰っていたりもするのですが、それくらい新刊本というモノはオーラを放っていて、知識青年たちの憧れの対象でした。

——読書サークルは何人でやっていたんでしょう？

谷川 最初は十五人。ちゃんと規約があって、二十人まで。一人十銭ずつ出し合って、そのお金で次のなんの本を買うか決める。それもちゃんと会議で決めるんです。結構複雑なシステムになっていて、購入した本を輪番で読む。本がまだ高かったので個人では対応できないんですね。何人か集まって買って融通し合う。今のようには図書館があるわけではないので、買うしかないんです。その本を溜めていつ

て図書館を作ろうとした。もともと古い図書館が函館にあるのですが、函館や弘前は早くから外国人宣教師がいたりと外国の影響を受けていた所なので、こうしたやり方を考案したのは、そんな背景があったからだろうと考えています。

——いまさらですが、日本人の識字率ってすごいし、知識欲もすごいですね。

谷川 向上心というか向学心というか、知りたい心が高かったんですね。東京の情報ほう入ってきていますから、そこになんとかアクセスして、地元で図書館を作って行こうとする。新しい思想とか文学に対する飢えのようなものが彼らをつき動かしていたと思います。

——そう考えると、最近の文字離れはちょっと淋しいですね。

谷川 大学生でも長編は対応できないようですよ。

——でも本屋さんに、人はいっぱいいます。

谷川 本が読みたいのではなく、基本的に情報が欲しいんですよ。本屋さんのサイトを私も利用しますが、それは閲覧ではなくて、キーワードを入れて検索するものですよ。昔は趣味と言うと読書と言いましたが、今は読書と答える人は少ないんじゃないかな？

——でもたった百年ですよ。その間にずいぶん日本人は変わりましたよね。

谷川 日本人が変わったかどうか……。それは何とも言えないけれど、家の中にじつくり腰をすえて読まなくちゃならないような本がある、子供向けの絵本などではなく、大人が読む本が並んでいるという環境が少なくなったということも影響しているんじゃないかな。

——本棚に並んでいる本の背表紙を見ているだけで、たくさんの作品名と作家名を覚えてしまった経験があります。家庭環境の変化か……。

谷川 図書館は本を廃棄している時代ですよ。本は溢れているんです。

——溢れるほど本があっても、今

何か調べたかったら……。

谷川 ネットです。大学生もみんなそうですよ。ネット検索です。

——ネットは間違っている情報もたくさんありますよ。

谷川 間違っても自分の専門分野ならまだわかりますが、少し専門から離れてくると、正しいかどうかちょっと判断できないですね。

——弘前の青年たちの活動を研究されて、そんな今を見たとき、いかがですか？

谷川 あの頃は、向学心が高く、また図書館を作ろうとしていたから、新刊に対する飢えがすごく強かったと感じますよね。今も確かに新刊本に興味のある人たちはいますが、どうも鼠眉の作家に対するだけの興味という感じがします。当時の青年は最初から図書館を作ることが目的で買っているから、多種多岐にわたった本があるんです。教師らからぬ本の中にはありますから。

近代の「読書空間」は受け手の努力で二十世紀初頭には充実した形になっていきます。「自他楽会」の場合、融通し合って輪番で読んだ後、本は会にストックされていくのですが、そうして溜まった本は、会員が自由に借りて読んでいいことになっている。それで、会員ごとにどんな本を借り出しているのかを見ていくと、その人の個性が見えてくる。この人は小説ばかり読んでいたとかね。これはすごく面白いことだと思っています。極端にいえば、江戸時代は日本国中みんな同じ本を読んでいるでしょ？ 現象としては今もそうですよね。これが売れているから今はこの本を読まなければならない、というような強迫観念で読んでいるような気がする。みんなが読んでから読むという。

——ああ、だから一つの本だけが極端に売れるんですね。文字離れと言われているのに、一冊だけ極端に売れる。

谷川 弘前に残された明治の青年たちの記録を見ていると、だんだん自分の好きなジャンルとか、趣向が表れてきます。先ほども話したように、読んでいるものを見ると、この人は小説が好きだとかいう傾向、個人差が出てくるんです。内面の傾向と読む本がリンクしてくる。このことが「読書空間」なわけです。自分の個性、自分が自分らしくなるための読書ですね。

江戸時代から考えると、一巡したかと思えますね。これから決定的に変質するんじゃないですかね。図書館も姿を変えていくんじゃないでしょうか。



『陽明文庫展』

担当する面白い先生たち

国文学研究資料館 機関研究員 学術企画連携部 展示企画室

国文学研究資料館 研究部

中村健太郎 さん

准教授 海野圭介 さん

陽明文庫は旧公爵近衛家に長年にわたって伝襲した、大量の古文書および古典籍、

ならびに若干の古美術工芸品を一括して保存管理している、特殊な歴史資料館である。

京都市内の西北、嵯峨野にもほど遠からず、双ヶ丘や桜で有名な御室仁和寺に隣接する勝景の地宇多野、

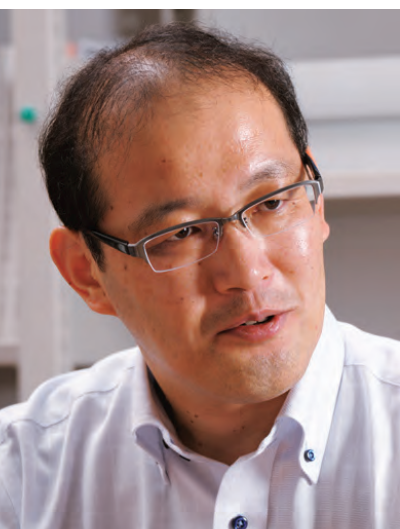
その一段奥まった山ふところの幽境に、高床式鉄筋土蔵造りの書庫二棟、事務所棟、さらには百二十余坪の数寄屋建築の閲覧集会所と、

そのいずれもが国の登録文化財である施設を構えている。――「陽明文庫の沿革（名和修陽明文庫文庫長）」より抜粋

まさに皇室と近衛家のつながりを示す重要な資料です。一番古いのは後朱雀天皇の書状。

――今回の陽明文庫展は何がメインですか？
中村 陽明文庫の中から歌合にしぼって、展示期間を三期に分けて、あるものを全て展示しようと思っています。全部というのが一つの目玉です。分量が多いのでまとめて展示する、一同に並べるっていうことは今まで殆どありませんでしたから。

――陽明文庫を訪ねて京都へ行き、蔵の中の国宝を間近で見せて頂いたのですが、本当に保存がいいんですね。

海野 元々のモノが抜群に良かったということもあるし、蔵の中にしまっていて人目に触れなかったということは大きいでしょうね。**中村** 今回は歌合以外にも近衛家に伝えられたお宝、国宝を中心に展示します。例えば、御堂関白記。藤原道長の自筆による日記です。それから和漢抄。平安時代に貴族がどういうものを持っていたかということを実際に見ることができる例です。陽明文庫ならではのものとしては、歴代天皇の御宸翰。
――御宸翰って？**中村** 天皇の直筆筆跡のことです。それは近衛家の歴史を語る上では絶対必要な資料です。天皇の書は交流がないと下賜してもらえないので、普通の家にはまず伝わらない。を伝えていると考えられるようになります。和歌の解釈から比喩的に秘密を作って行く。私は、室町から明治の前まで天皇家が伝えて来た和歌の秘密の歴史を研究しています。
――面白そうじゃないですか！
海野 面白いです。大きな紙に一文字だけ書いてあるものがあって、これは一体何なんだろうってずっと考えていて、ふと別の資料を見るとその解説が出てきたり、また別の資料を探し当てると、この二つを組み合わせると実はこういうことを伝えようとしているんだ、どうだ！みたいなのが出てきたり。――その資料って、活字資料じゃなくて、昔の現物を調べるんですよ？
海野 そうです。皇室に伝えられたものがメインです。宮内庁とか京都御所にあるものなど、バラバラに保存されているものを集めて調べています。
――それも大変ですね。**海野** そうですね。今の教育って数学は数学、国語は国語といったカテゴリーの意識が強いですけど、昔は和歌を使って芸術的なことはもちろん、道徳的なことや作法、文字の書き方も教えるんです。だから遺された資料には、現代の分類概念にあてはまらないものも多くあります。それをこれは文学、これは書道、これは娯楽、これは道徳とかって腑分けをしようから、どこに入れていいかわからないものや違う棚に入ってしまうものが出てくるんです。
――有名私立男子校で、「銀の匙」だけを使っている授業があった。あれと……。**海野** そうですね。そこに入ってくる社会的背景とかも一緒に勉強するので、自分がなぜそれを勉強しているのかわかるわけです。全体が押さえられないと、断片的な知識ばかりになって、覚えただけ何に使っていいかわからない。とりあえず知識としてとっておこう。そうやってしまっていますよね。――中村先生は何を？
中村 海野先生は和歌の、私は書の秘伝を。
――書にも秘伝があるんですか？**中村** はい（笑）。あるんですよ。天皇家の書道の秘伝の研究をしています。近代

海野圭介さん

（陽明文庫展は十月八日から開催予定）
でも、何年か、何百年かすると、満たされない心をやって満たすとか、満たされないまま転落していくものをどうやって描くかがテーマだった変な時代だったよね、あの頃はって言われるかもしれませんよ。価値観の体系って意外に脆いと思いますよ。以降は、あまり役に立たないということと忘れられてしまふのですが。注目されないまま忘れ去られて、今の日本の書道史の研究でも亜流のように考えられています。本式ではないというイメージからきちんと研究した人がいない。それを一所懸命研究しています。
――よくわからないです。秘伝、なのに役にたたない？**中村** 権威だからです。前近代の天皇制は論じられるものでした。天皇ってなんだろうとか、天皇はどんな風に見えるのか。公家もそうです。字がその人の風格を表すということを伝えています。今は書道の技術、美しさを追求しますが、前近代は違う。字には人格が込められていると考えたんです。比べるための条件ではなく、天皇になったら習わなければいけないことで、それを習得しないと民を治められないと考えられていた。お金もばらまけない、科学技術などもない時代、民を治めるには徳をつけないと。で、明治以降はやらなくてよくなった。**海野** というか近代化で、「近代以前のそういったものは合理的ではなくて、文学とは文学的な素養だけ、書道は書の美しさだけ、それ以外のものは不純だ」と言い切られちゃったんです。国文研は不純な人が多いから（笑）、捨てられたものをもう一度集めてみようとする人もいます（笑）。和歌の秘伝にしても書の秘伝にしても、道徳的な意味合いが非常に強くて、和歌や書を芸術だと思うと変なものに見えるかもしれないけれど、当時においてはそれはそれで意味があったんです。

現代作家の作品は、自分の心の中に満たされないものを抱えている人が主人公って例が多いじゃないですか？全て満足していて、俺は楽しいぜ！っていう人が主人公の作品は賞を取らないでしょ？それは、心は満たされないものだというのが前提で、それを描くのが小説だという先人観で私たちが小説を読んでいるからではないでしょうか。

でも、何年か、何百年かすると、満たされない心をやって満たすとか、満たされないまま転落していくものをどうやって描くかがテーマだった変な時代だったよね、あの頃はって言われるかもしれませんよ。価値観の体系って意外に脆いと思いますよ。

中村健太郎さん：平成29年3月末現在 帝京大学短期大学 人間文化学科 助教

うと、原本を研究する人はいなくなっていました。しかし、よく見て頂くとわかるのですが、原本と活字とでは印象がまったく違うんです。原本を見ると筆跡が微妙に違う場所があります。『類聚歌合』は一人の書写者が書いているのではなく、多くの人が寄り合って書写している。中には漢字が書けない人もいて、同じ文の中で仮名と漢字で筆跡が異なる場合もあります。訂正や書き入れの跡もあって、この本が丁寧に作られてきたことがよく分かります。
――本にも人生があるんですね。**海野** あります。原本はこうして巻物になっているのですが、太い巻物だったり細かったりします。本来は同じようなものだったと思うのですが、途中が切り出されて細くなってしまうものもあります。
中村 展示は、読めなくても見るだけで何かしら感じるものがあると思います。現物の力ですね。それと、見過ごされがちな見どころが表具です。表装がなされている物は表具と合わさってひとつの作品になっている場合があります。中味に対して負けないようにという美意識で作られています。文字が読めなくても楽しめます。**海野** お宝満載ですね。ところで先生方のご専門は？
中村 私は国文学ですから、至極まっとうです（笑）。
――中村先生は？**中村** 僕は法学部なんです（笑）。法制史、法学部でも現行法ではなくて、法律の歴史をやっていました。もともと古典籍に関心があって、古い時代に書かれたものが基本的に好きですね。――では、こういった歌合の原本もスラスラ読めちゃう？
中村 まあ、スラスラ。私、ランドセルに崩し辞典を入れてましたから（笑）。――すごいですねえ！
海野 私は普通の人でした（笑）。**中村** うちはおじいさんが郷土史研究をしていましたの。――やっぱり環境が人を育てるんですね。海野先生の国文学とは？**海野** 古今伝授と呼ばれる和歌の秘密を伝える儀礼です。例えば、古今集の中に不思議な名前の鳥が記されていて、それは一体何かということが疑問視されると、疑問が秘密を生んで、それが象徴的にある道徳的な徳目や統治の理念

江戸時代の立川が

おもしろい！

大消費地が近いって、今と同じじゃない？

古文書を解読すると、昔の人が動き出す。

国文研アーカイブス、最高！

多摩川の鮎、お鷹の道

武蔵小杉辺りに小杉御殿というのがあって、江戸時代の本当に初めの頃、将軍が鷹狩りに来たときの休憩所になっていました。その時に季節が合うと鮎を上納する。それが享保年間、吉宗の時に「上ヶ鮎御用」という制度になる。吉宗が子持ち鮎を好きだったところから始まっているのですが、年間に千百尾くらいかな、それを何回かに分けて上納しなさいというわけです。多摩川の上流から中流にかけて、もちろん立川も入りますが、御用請村という「上ヶ鮎御用をやりますよ」と手を挙げた村が組合を作って、鮎を漁獲し江戸へ運ぶというシステムがあったのです。

この時代に川柳が流行りましてね、『諷風柳多留』の中にね、『玉川は江戸に出がけに米をつき』という川柳があるのです。これを見た時、「これだっ！」って思ったわけですよ。まさに上ヶ鮎御用を詠んだ句だと思ったのです。『多摩川周辺の人は江戸へ出てくるとすぐ米を搗いているよ』ということなのですが、鮎とどう関係があるのか。上ヶ鮎御用というのは、川つべりに生け簀箱を作って漁獲した鮎を囲って、指定の期日前夜に鮎籠に入れて、それを馬荷にして、鮮度が落ちないように急いで江戸へ向かうので

江戸時代の立川

武蔵野の開発は一六六〇年代の寛文の時期と、その後は享保改革の時とあるのですが、享保改革の時にいわゆる武

とで、この地域の文書をおもに担当しています。

まず古文書を整理して目録を作ります。国文研に来て最初に担当したのは、多摩市の石坂家文書でした。中和田村、今のモノレールの大塚・帝京大学駅辺りです。浅井という旗本の領地、旗本というのは大名になれていない幕臣のことです。大名は一万石以上、一万石以下で将軍にお目見えできる人たちは旗本と言うのですが、浅井家は貧乏で、領地からの年貢の前借りは当たり前、村役人たちを保証人にして江戸の町人から借金を繰り返すありさまで、挙げ句の果てには裕福な旗本の家を転々として、地元では「居候地頭」と呼ばれていました。殿様が居候地頭だと、領民も肩身が狭いんですね。露骨に差別されることもあって、和田の領民が地頭のために立ち上がり、財政プランを立てて交渉しにいくなんていうこともあったようです。そういったことが文書からわかります。

国文研が多摩地域に移転してきて、地域の方にも理解していただくということで、立川市の教育委員会に招かれて公開講座などもやりました。今は、三多摩公立博物館協議会の方たちと一緒に、研修やワークショップなどをしています。こうしたネットワークができていないと、例えばお蔵が取り壊されるということがあっても情報を得られない。文書が入っているかもしれないお蔵が壊されるという事態はいつでも起き得るんです。実際に立川でも砂川八番に須崎さんというお宅があって、そのお蔵が取り壊される寸前に立川歴史民俗資料館に連絡が入り、筑波大学の白井哲哉さんたちのグループが大急ぎで調査をしたということがありました。古民家園に移築された三階建の蔵で、三階と二階に資料が残っていて、それを整理するということで、私も呼ばれて手伝っています。立川市では、市史編纂の事業が始まりました。そこでも文書の所在把握や整理は、重要な仕事と位置づけられています。

砂川村は大きな村で、全体をみる名主さんは砂川さん。村の中がいくつかの組に分かれているのですが、はじめは八番までで、幕末には十番まで。須崎さんのお宅は八番組の組頭だったのです。最終的には名主が全部を束ねていたのですが、その組の中の財政というのはよくわかっていなかった。それがこの須崎さんのお蔵から文書がでてきて、徐々にわかってくるようになりました。組頭は、本来名主

蔵野新田が拓かれていきます。この辺りは江戸という大消費地があり、とても立地がいい。馬に荷物を乗せて、あるいは車力で、頑張れば日帰りできる距離ですよね。立川近辺がぎりぎりだとは思いますが、江戸向けの野菜だとか炭・薪などを売ってね、行ったらそのまま空手で帰ってくるわけではなくて、今度は下肥を調達して積んでくる。地元で肥料にするためですね。糠なども仕入れてきて肥料にする。下水道が完備される前は、私たちも汲み取り式でしたよね。その場合は汲み取ってもらう方がお金を払う。江戸時代は逆でした。長屋などのある一画に共同便所があって、家主というんですが落語に出てくる大家さん。大家さんが汲み取りの権利を、立川辺りから来たある百姓に売るわけです。その農民は、大家さんが管理する一画の汲み取り独占権を持っていて、江戸へ出てきた時に野菜を売って、帰りに汲み取りして下肥を積んで立川辺りに帰る。東側は水路が発達していたので船で運びましたが、武蔵野は馬か車に積んだでしょう。まさに有機野菜ですよ。

武蔵野の雑木林は、今のようには背の高い林ではなくてもっとずっと背が低かったといわれています。江戸時代の武蔵野の林相は、クリとマツ、そして雑木と呼ばれるクスギやコナラなどの落葉広葉樹が中心でした。クリは実が食用にな

がやるような仕事の下請けを全部やっていたようです。例えば、火事になった時の事務処理。一軒焼けただけだったら名主さんに言うだけでいいよねって。あまり大事にしないということですね。でも類焼しちゃったら、これはもう代官所へ訴え出るしかないよね、という細かい取り決めまでやっていたり。幕末の砂川八番は二十八軒ありましたが、そのうち姉さん女房世帯が七組もあるんですよ。こんなことも面白いでしょう？ 砂川は女性にとつて結構住みやすい村だったようです。理由のひとつには、養蚕と織物をやっていたので、女性の労働力が必要だったこと。ですから御当主の姉妹や娘が奉公に行かなくていいわけですよ。織物は村山紉を作っていて、子宝に恵まれるという群馬県の産泰社の講を組織して、奥さん方の代表が年一回お参りに行くというようなこともやっていました。相対的に女性の地位が高かったのでしょうね。こうした地域のもっているアイデンティティとか個性とかをきちんと記録していくことは重要ですよ。

古文書もそうですが、現代文書もアーカイブスとして大事です。行政文書は残ると思いますが、民間の文書が残っていない。戦前のもので民間のものが危ないです。紙も悪いからボロボロになっていたりするんで、捨てられてしまふんです。地域のことを知る重要な手掛かりになるんですけれどね。

ところで、えくてびあんの文書管理はどうなっているんですか？ できあがった冊子はきちんと保管されているのでしょうか、一冊ができるまでに写真だつて、原稿だつて、そのひとつを選ぶまでに何百枚つてあるはずですよ？ えくてびあんの眼を通して観てきた「立川」。絶対いい記録になるはずですよ。いやあ、その保管ってどうなっているのか、興味あるなあ。

太田尚宏氏

国文学研究資料館 准教授。専門は日本近世史。東京学芸大学大学院教育学研究科社会科専攻（修士課程）を修了後、東京都北区の北区史編纂調査会編纂専門員、公益財団法人徳川黎明会徳川林政史研究所研究員、主任研究員を経て、二〇一二年四月より国文研。武蔵野を含む江戸周辺の地域編成に関する研究や漁業史・林業史などの産業史研究に従事する。著書に『幕府代官伊奈氏と江戸周辺地域』岩田書院、共著として『森林の江戸学』東京堂出版、『江戸時代の古文書を読む』全十冊東京堂出版、『江戸文化の見方』角川学芸出版など。



るだけでなく、腐りにくい建築材としてよく利用されました。マツと雑木の関係は面白くて、落ち葉がとてもいい肥料だったので、当時の農家ではきれいに集めて堆肥にしましょう。すると、土地が痩せて、今度は養分が少ななくても育つマツが優勢になります。マツは脂が多くて燃料としては最適で、細枝を伐り払って薪や炭にして、江戸へ運んで売るのです。そしてまた、ちょっと落ち葉掻きをしなない場所ができると、そこには落葉広葉樹が育って、たくさん落ち葉を出す。そんな風に枝木や落ち葉を使いながら雑木林を維持してきました。今では落ち葉や枝木を堆肥や燃料として使わないようになったため、土壌の富栄養化が進んで、落葉広葉樹林の次の段階となるシイ・カシなどの常緑広葉樹が繁茂して、背が高く立派な林になってしまったというわけです。

アーカイブス

どうしてそんなことがわかるのかという話です。それは地域に資料が残っているからです。古文書とか紙に書かれたものがある。今から少し前なら写真とか映像とかでもいい。そういったものを丹念に調査して一般の方にも見ることができるようになるのが、国文研のアーカイブスの仕事です。

私は大学も多摩地域だったので、土地勘があるというこ

これからの日本文学研究

グローバルを考える

グローバル時代を迎えた日本文学研究のこれからを

国文学研究資料館の館長に語ってもらった

真のグローバルとは

世の中は今、なんでも「グローバル」になっていますね。ふた昔ほど前までは国内中心の日本文史や日本文学の研究でしたが、近ごろは国際的な共同研究をいろいろなところでやっています。国文研でももちろんやっていますし、他の大学でもやっています。国際交流ということで、外国でシンポジウムをしたり、あるいは外国人研究者を日本に招いて国際シンポジウムをしたり。外国人研究者が交って確かに「国際」なのですが、ここにひとつ問題があります。それは、参加する外国人研究者はみんな日本語に堪能な研究者だということです。一方、こちら側は英語もフランス語もほとんど使えない。それはかなり偏った国際交流なのではないかと、以前から思っていました。本当の、50／50の国際交流とは言えないのではないかと。

ふりかえて私たち日本人の外国文学に対する態度はどうだったか。フランス語やドイツ語、ロシア語が読めなくても、バルザックやジッド、ゲーテ、トルストイなどを翻訳で読んで感動してきました。それと同じように海外にも日本語は読めないけれど日本文学に感動している人はいるのではないかと思うのです。日本文学を英訳や仏訳で読んで興味や関心を持つ人は少なくないと思います。ところが、昨今の日本文学研究の「グローバル」は、まだそういう人々には門戸を閉ざしています。もうそういう時代ではない。実際に川端康成、大江健三郎がノーベル文学賞をもらっている。日本文学がノーベル賞をもらったことは喜ば

しいことですが、しかし、考えてみるとそれは日本語でもらったのではないのではないか。川端さんも大江さんも英訳、仏訳された作品で評価されたのではないでしようか。つまり、日本文学は外国人にどのような印象を与えているかということとは外国語訳で読まないといけないのではないのか。そういう意味で、海外にいる日本語を読めない日本文学愛好家にも、私たちの研究成果を届けることで初めて本当の「グローバル化」になるのではないかと思うのです。

50／50の国際交流のためにすること

そのためには、私たち自身が英語、あるいはフランス語、今の国際語は英語ですから、まずは英語で発信していくことが大事だと思います。私自身もそうですが、そして私より少し後の世代までは、大学で日本文学や日本史を専攻するという選択をした時には、外国に行くことはあきらめていました。縁がない、外国旅行には縁なき衆生だと思っていた。英文学とかフランス文学、あるいは西洋史を研究する人たちは、国費留学生などになって海外に行くことは普通でした。けれども日本文学や日本史を選択した時には、外国に勉強に行くなどということは全く考えもしなかった。日本語での勉強ばかりしていたわけです。ところが交通網が発達して海外との往来が簡単になったことで、日本の古典の場合ですと、実は海外に日本の貴重な古典籍がたくさんあることがわかってきた。大英博物館や大英図書館などは以前から有名ですが、それ以外にも欧米の有名な大学には寄贈された日本典籍の立派なコレクション



今西祐一郎氏

人間文化研究機構 国文学研究資料館 館長。1972年（昭和47年）品川区戸越に創設された我が国初の文系大学共同利用機関 国文学研究資料館。2008年（平成20年）、立川に移転直後より4年を任期として館長に着任。その後2度の再選で本年最終の8年目を迎えている。

します。文系の中でも語学ができないのが日本文学と日本歴史をやるのです。私たちはそういう最低の人間です」と自虐的な自己紹介をして拍手をもらったことがあります（笑）。自慢にはなりませんが、読んでくれないか、見て調べてくれないかと。

地区の司教だったマリオ・マレガ神父が収集し『豊後切支丹史料集』『統豊後切支丹史料集』という二冊の史料集にまとめて、その史料は一九五三年にマレガ神父によってバチカンに送られ、バチカン図書館で保管されました。二〇一一年にバチカン図書館で一万点に及ぶこの史料集の原史料が発見されたのですが、それらはバチカン図書館では読める人がいないので、それまで在イタリアの日本古典籍調査を行っていた国文研に手伝ってくれないかという調査協力の依頼がきたわけです。日本側では私たちと国立歴史民俗博物館、東京大学史料編纂所、大分県立先哲史料館が参加し、代表機関は国文研が務めています。これは海外で大きなニュースになりました、なんと言ってもバチカンですからね。

在海外の資料としては、一昨年まで主としてオランダにあるシールト父子の資料調査もしましたが、シールトにしてもバチカンにしても、現時点では調査も成果報告も日本語で進めていて、対等に外国語でやりあっているわけではありません。でもこれからの研究者は、英語で最低のことは言える能力がないといけませんね。もうずいぶん前に、上野千鶴子さんが『国境 お構いなし』（二〇〇三年、朝日新聞社刊）というエッセー集の中で、「語学が嫌いだから、日本史や日本文学を選んだ、と言っているられる時代は終わった」と書いています。自分のことは棚に上げて、その通りだと思えます。

以前、理系の人の前で話した時に、「文系に来る人間はまず数学ができないか、あるいは嫌いだから文系を専攻

しかし、今は日本文学がブームというほどではないし、海外の日本文学研究者、中でも古典の研究者がそんなに多いわけでもありません。むしろひと頃より減っているかもしれない。日本の退潮は研究の世界だけではないようです。突飛な話を持ち出しますが、ファッションモデルに關してもそうらしい。少し前、そのことを指摘した新聞記事を読みました。国の経済が発展している時は、モデル業界も盛り上がる。パリコレなどで活躍する「スーパーモデル」の勢力図は国際経済の縮図」なのだそうです。日本経済は減速中で、中国、東欧、旧ソ連など新興のBRICs諸国の勢いがすごい。そして、日本のモデルはというと、雑誌モデルからタレント、女優になるという日本固有のルート、海外の厳しい環境で勝負しない構造ができていくというのです。さらにもしろかったのは「国内で活躍するモデルの多くは身長一七五センチ以下なので世界では通用しにくい」という指摘でした。まさに「かわいい」に向けたガラバゴス化です。

研究の世界にも通じる現象のような気がして、興味深い新聞記事でした（「日本人モデル 世界は遠く―「かわいい」偏重進むガラバゴス化」日本経済新聞三月二十六日夕刊）。

また、大学生が海外に留学したがない、新入社員が海外で働きたいとは思わない、ということが、最近話題になっています。内向きということとは、日本が快適だということでしょう。海外がテロなどで怖いということよりも、やはり国内が快適。

内向きという点では、江戸時代がそうでした。鎖国です

があるのです。日本にない本も海外にあったりする。国文学研究資料館でも三十年ほど前から、そういった古典籍の調査をやってきました。日本文学の古典を勉強するためにも海外に行く必要が出てきた。そういうことで国際交流が盛んになってきたのです。

これまでの海外での調査、研究は日本語のよくわかる研究者を相手に共同研究をするに留まっていたましたが、これからは日本語がわからない日本文学愛好家や日本の歴史に興味のある人々にもっと関心を持ってもらえよう、我々もきちんと発信していく義務があるのではないかと思っています。国文研では目下、国際共同研究プロジェクトの研究成果を日本語だけでなく英文で、しかも誰でも見ることが出来るオンライン・ジャーナルで発行することを計画しています。そのために、今年になって米国コンビア大学出身のクリストファー・リーブズさん、またパリ大学出身のディディエ・ダヴァンさんを、教員としてお招きしました。将来は館長にも外国人研究者が就任するようなことになるかもしれませんね（笑）。

国文研の仕事

現在バチカン図書館での調査も行っています。「マレガ・プロジェクト」と言いますが、江戸時代の豊後国（大分県）のキリシタン史料で、現在バチカン図書館に所蔵されているものです。キリシタン弾圧・統制に関する膨大な史料です。宗門改めといわれるものなど、「私はキリシタンではありません」という内容の文書ですね。それを戦前に大分

ね。新聞記事に指摘されていたように、内向きの時代に生まれる文化はガラバゴス化します。ものすごく優美繊細に発展するけれども、他の文化との互換性に乏しい。それこそが魅力だとも言えるのですが、日本は豊かになりました、しかし過剰に、あるいは偏って豊かな文明はやがて減じるのですね。歴史が物語っています。「きれい」とか「かわいい」とか、爛熟した文化の表れだと思います。でも爛熟ですから腐る一歩手前です。

江戸時代、アメリカに脅かされて明治維新でそれまでの文化を担ってきた人がほとんど没落しました。薩摩や長州の地方人が江戸へ出てきて、明治政府を作って、それで日本は救われたわけです。中国も、王朝が貴族化して爛熟しては滅びて新王朝が起るとい歴史を繰り返してきました。

政治家は困るかもしれないけれど、文化はそういう時にえもいわれぬ美的達成をなしとげます。それをもてはやすのはちよつと無責任でもありますが。

鉄心斎文庫のこと

国文研にとって今年になっての特筆すべき出来事は、伊勢物語コレクション「鉄心斎文庫」を寄贈いただいたことです。これは個人のコレクションで、小田原で鉄心斎文庫伊勢物語文華館を設置しておられた芦澤美佐子氏が、ご主人の故・芦澤新二氏と長年かけて収集された世界最大の伊勢物語コレクションです。『伊勢物語』の伝本、注釈書、カルタ、屏風など関連資料千点余り。評価額は八億円にのぼります。大きな個人コレクションは少なくありませんが、一つの作品だけに的を絞ったコレクションで、こんなに膨大なコレクションは、日本にはありませんし、おそらく世界にもないでしょう。

国文研では立川への移転以前、まだ品川の戸越にあったころ、その蔵書の一部を拝借して「伊勢物語展」を開催したこともあるのですが、今年度からはその鉄心斎文庫の共同研究を開始し、来年度には「鉄心斎文庫伊勢物語展」を複数回にわたって開催する予定です。そして、現在、国文研で展開中の人文系唯一の大規模学術フロンティア促進事業「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」においても、その画像をインターネットで世界に向けて公開していきます。それは大学共同利用機関としての国文研にふさわしい事業になると確信しています。

禅の国、日本？

お互いに嬉しく「勘違い」

今西館長に続く国文研第二陣

フランスからいらしたダヴァン先生に流暢な日本語で語ってもらった

フランスの事情

前号で今西館長が「50／50のグローバルは、日本人研究者も英語かフランス語ができないといけない」という主旨のことを話されていました。僕はフランス語は大丈夫です。フランス語には自信があります（笑）。

日本文化はフランスで大変人気があります。ひと昔前、日本の映画はどちらかというと、日本よりもフランスの方が人気があると言われていたくらいです。日本の漫画が一つ売れている国は、日本の次はフランスだそうです。日本の漫画のほとんどが仏訳されていると言っていると思います。マンガだと思われるものでも、なぜかフランス人が知っている場合もあります。フランスの本屋さんに行くと、日本の本屋さんにも負けないくらい漫画本が置いてあります。

日本文学も昔から人気があります。日本思想も人気がありますが、そこには少し「勘違い」が入っていると思います。今西館長のおっしゃる通りですね。日本のものが海外に出ていくのはいいことだと思いますが、翻訳を通せば理解はどうしても変わってくるわけです。実際はどう理解されたか、その理解に基づいて日本への憧れとかイメージがどう作られたか。それはこれからの研究の大きなテーマのひとつだと思います。

一休さん

禅は日本の社会にどういう影響を与えたか。二十世紀には「禅と日本文化」という本がいくつかありますが、鈴木大拙先生の本が一番有名でしょう。大変著名であるが、一方とても批判されるわけです。最近ではその本の理解が見直されていますが、鈴木大拙などの影響で長い間「日本文化＝禅」という「勘違い」が起きることになります。今でもそう考えている人は少なくないでしょう。たとえば俳句と禅が関係あると言われているのは鈴木大拙の影響があると言われていますが、よく見れば芭蕉の句を禅的に解釈するということは割と早い段階、鈴木大拙よりもずっと前からありました。確かに、日本の文化はなんでもかんでも禅という過ちは過ちであって直さないといけないのですが、では何も関係なかったかというところでもありません。芭蕉の周囲には禅の修行をしている在家の人たちがいて、その人たちは自分たちの理解していた禅に基づいて俳句を解釈したことは間違いない。ですから、もう一度きちんと思想を理解して、お坊さんたちがどのようにに在家と関わってきたか、あるいは在家はどういう風に禅を理解しようとしたのかを、突き詰めなければなりません。日本思想と文化を往來することで、何か見えてくるのではないかと期待しています。僕のやりたいことは、だいたいこのようなことです。すみません、長くて（笑）。

「勘違い」はどこから来たか

金閣寺は禅寺ですよ。でも禅寺として誰が観ているのでしょうか。東山文化的なものが禅の象徴であるというイメージがいつから生まれたか。それは僕も知りたいところです。禅といえば竜安寺の枯山水というイメージが浮かんでくるでしょう。それは日本だけでなく世界中そうですね。正しいとか間違っているとかでなく、イメージとしてはありますよね。その「勘違い」はどこから来たか。西洋人が禅はそういうものだと思っていたわけではないし、日本人が嘘の禅を作ったわけでもない。「禅」という名の日本丸』を書いた山田獎治は「魔法の鏡」という言い方をしていますが、自分が美しいと思っているイメージを相手に出す、相手も自分の思う美しいイメージを示す。つまり西洋（主にアメリカ）が、自分たちが持っていたイメージに基づいて「禅は素晴らしい」と言ってきたわけです。日本は「ああ、そうですか。では僕たちは禅です」みたいに。お互いが喜ぶ嬉しい「勘違い」。そのような経緯で今の禅のイメー

私は一休を研究しています。一休に興味を抱いたのは割と早い段階からですが、それは私の「勘違い」からでした。もともと日本語ではなく哲学に興味を持っており、そこに至るには美学があり、パリの大学で修士論文を書くときに選んだのは、美学の価値観がどういう風に生まれてくるか、ということでした。たまたま図書館で柳宗悦の論文集を見て、お茶の茶碗が室町以前はそれほど価値がなかったのに、戦国になるとものすごく価値が出てくる。短期間で価値が変わった、それならそれを研究しようと思って先生に相談しました。先生に「初心には難しすぎるでしょう」と言われました。お茶の美学が様々な分野でなりたっています。そのひとつに絞ってくださいと。そこで千利休、武野紹鷗、村田珠光、漚れば一休。そこで一休を研究すればお茶の美学を理解できるだろうと思って一休の研究をすることにしました。結局、今はお茶とは何の関係もない研究をしていますけれど。

一休を研究するということは、最初は漢詩ですから文学ですね。でもそれはやればやるほど、文学と思想と両方やらなければならない。それを深めて結果的に思想の方に進んだということです。日本思想です。思想とは何か？ いやな質問をしますね。実は思想という言葉は便利で、本心は哲学という言葉を使いたいのですが、哲学という言葉を使うと「日本に哲学はあるかないか」というような硬い話になってしまいますから、思想という言葉を使っています。「仏教思想」という使い方もしますね。みんな思想という言葉

ジができたと思うのです。西洋に何かが欠けている、宗教が弱くなった時に物足りなさを感じる。科学は強くなったのですが、何かが欠けていてその欠けている部分は実は東洋にあると。いわゆるアジアだけでなく、概念としての東洋ですね。東洋の何か、そのひとつが禅だということです。おそらくチベット仏教も同じことだと思います。確かに「勘違い」ですが、日本から観ると嬉しい勘違いですね。「あなた、すばらしいですね」「ああ、そうですか。じゃあすばらしいです」ということですね。

研究者の仕事

勉強は大嫌いです。得意じゃないし。でも研究は好きです。他のものが下手過ぎてできないというのもありますが、これしかできないから研究しています。研究者というものはものすごく贅沢だしわがままですね。自分が気になることを突き詰める。それを皆さんの税金でさせて頂いているのですから、本当に申し訳ない。僕は毎日、感謝しています。それならば、逆に何を返せばいいかという問題ですが、自分の理解したことを、考えたことをできるだけ発信することだと思っています。誰もがができるわけではないものすごく専門的なことを研究することで、このわがままを許して頂けると勝手に思っているわけです。存在意味があまりないと言われても正直、反論できないです。たとえば、一休を全部理解したとしても、じゃあ社会に何の役にたちますかと言われたら、それまでです。が、逆にそういう文化がないと社会の意義もなくなってしまうのではないのでしょうか。日常生活以外のことを考え始めるのが文明の始まりだと思っています。ちよつと飾ろうとか、ちよつと絵を描こうとか。それを詳しく調べるのが研究者の仕事で、こちらから発信することよりも、そこで何を伝えられ

葉を使っていますが、では思想とは何かと訊かれたら、困る人が多いでしょう。

一休さんの漫画はもちろん知っています。国文研にいらした岡雅彦先生の本『とんち小僧の来歴』にありますように、一休さんはとんち小僧と言われていますが、実は違います。江戸時代に人気を博した大人の「一休」の像もフィクションです。室町時代のお坊さん、臨済宗の僧である一休のおもしろい所は、私には「狂雲集」にあります。お酒を飲んだりとか、女性と関係を持ったりとか、そういうことを平気で書いている。それが一休の特徴として一番知られているところでしょうね。破戒坊主のイメージが強いと思います。一休を理解したとはとても言えませんが、思想的に言いますと、一休は日本臨済宗のものすごく大事な転機に立っていて、一休を理解すれば日本臨済宗の大事なことも理解できたと考えるのではないかと思います。

私のやりたいこと

意外と日本の禅ってわからないところが多いです。世界中にとても人気があった分野ですから、全部研究されていると思います。研究成果のシンポジウムを聴いて「豊かな気持ちになった」と言っていたら、それはとてもありがたいことでこれ以上ない嬉しいことです。

たか、相手が何を受け取ったかがとても大事だと思っています。研究成果のシンポジウムを聴いて「豊かな気持ちになった」と言っていたら、それはとてもありがたいことでこれ以上ない嬉しいことです。

ダヴァン・ディディエ氏

Didier DAVIN 国文学研究資料館准教授。東京大学に4年間留学、2年間はインド哲学、2年間は東洋文化研究所に在籍。その後パリ大学で博士号を取得、フランス国立極東学院東京支部の代表として赴任。2016年4月から現職。



ひらめきで生きていく

人が好き、言葉が好き

返り点なしで漢詩を読む、くずし字の日本語を読む

関西弁も共通語も使いこなす

それがクリス先生

プロフィール

僕の祖父は鍛冶屋でした。父はバスの運転手、母は美容師です。僕の家族は、みんな学問は嫌い。先祖から農家でした。僕の家には最初の頃はテレビもラジオもなかった。今も僕の家にはテレビはありません。十何年もテレビは観ていないですね、テレビは嫌いです。今の家にはラジオもなくて本ばかりです。日本人の妻と子どもがいますが、家の中は静かですよ。カナダの家は大平原にありましたが、大学を卒業してバンクーバーに行って、初めて山というものを見ました。びっくりしました。山という言葉は知っていましたが、絵も見ただけではありませんが、実物は初めてでした。僕は若い時に木工をやっていたので、木で何かを作るのが好きです。本棚や机、娘のおもちゃは全部僕が作っています。木はいいですよ、生き物ですから。この鉄瓶、鉄もね、半ば生き物ですから、これもいいでしょう？ 長火鉢を買いましたよ。五徳を入れてね、炭で火を起し鉄瓶でお湯を沸かして、それでお茶を飲めばよい美味しくなるよ。

実家からバスで三十分くらいのところに中華街があつて、中国人、厳密には香港人がたくさんいました。同級生も半分以上は中国人でしたね。僕はそこでカンフーにはまってしまった。カンフーのおかげで中国語が勝手に身について、中学生の頃から英語と同じように、普通に読んでしゃべ

言語

これが娘の写真です。かわいいでしょ？ 本当にかわいくて、家についてずっと見ていたいです。僕の中には八歳の子どもと八十歳の老人の二人がいると妻が言います。その間はない。だから「子どもっぽい」と言われるのがとても好きです。遊ぶのはものすごく上手ですから、娘といくらでも遊べます。奥さんの写真ですか？ それは心の中に飾ってあります。

妻と僕はお互いのおかげで日本語も英語もうまくなりました。娘には一日おきに日本語と英語で話しています。初めて日本に来た時は、日本語はまったくできませんでした。漢字は読めましたが、日本語はできなかった。でも話が通じないといつまらないでしょう。それで夜中にお墓へ行って

でも僕には罪悪感が募るのです。自分の好きな本を読んでも、それについて論文を書いてお金をもらうなんて、変な社会ですよ。治療もしていない、人を守ってもない、橋も作っていない、それなのにお金をもらうなんて社会的にはおかしいでしょ。一方、精神的にみるとすごく貢献が大きいと思います。そう言わないと自分の存在を否定することになります。でも、本当はやっぱり恥ずかしいです。本当に僕がやりたいのは、僕の先祖のように農業をしながら暇な時間に本を読むこと。実現したいですよ。

国文研でやっていること

今、国際化、国際化ということで、そういう意味で必要とされているのではないかなと思います。何か国語も話せるので便利ですよ。ベルシャ語でパソコンのことを「ラヤネエ」というのですが、その意味は「便利な道具」です。で、僕も「ラヤネエ」かな、国文研の。

今までは漢文、漢詩が専門ということで来ていますが、日本文学ならなんでも好きです。くずし字はきれいだですが、読めてしまいます。今、十八世紀と十九世紀の類書、百科事典ですね、それを調べて日本と中国との関係を研究しています。例えば、僕は天狗が好きです。これは明の時代の天狗の絵です。「天狗は狗だったのか？」とは、いい質問ですね。それが肝心なところですよ。天狗は狗なのか、天狗とは何か。日本の天狗は人間の姿に似ています。羽が生えていて、言ってみれば鳥でしょう。中国には鳥と狗、というより狐っぽい姿の両方があったのです。日本にも最初は両方あったのに、では現代においては、なぜ狗の姿は消えてしまったのか。そういうことを研究しています。中国の「山海経」を見て、天狗のようなものがあるかどうか。天狗の話が出てくるのですよ。「ここにけだものあり、てんぐといわく」とかね。そういうものを時代に沿って辿っていく。こうして絵を見せながら語ったら変化がわかりやすいでしょう。関係する論文も集めます。日本語はもちろん、英語の論文、中国語の論文。三つ言語ができるから助かるのです。同じ類書をもても、違う言語世界からみると違う見方が出てきますから。

ひらめき

僕は面白い人？ そうですか（笑）。あなたも相当面白い（笑）。これは褒め言葉。幸せそうな顔をしていますね。見

ね、墓石を指でなぞって、なんて書いてあるのだろう、日本人はどういう風に漢字を使っているのだろうと、自分でいろいろ研究しました。昼間だと人が見るので怪しまれる。当然、夜に見られたらもっと怪しいのだけれど（笑）、田舎の夜は誰もいません。幽霊は怖くないですよ。無神論だから関係ない。幽霊が来ても面白いしね、話してみたい。来ているのに気が付かないと言うなら、それは来ないのと同じですよ。来るなら知らせてくれないと不親切ですよ。

言葉を感じるのが大変って言われますが、少なくとも漢字は苦勞ではなかった。他の人にとっては苦勞かもしれないが、僕には趣味ですからとても楽しい。今は毎朝、駅まで行くのにベルシャ人と待ち合わせして通っています。ベルシャ人の彼に僕が英語を教えて、代わりに彼は僕にベルシャ語を教えてくれます。僕には言語に関する嫌悪感がまったくありません。言葉は頭に残ります。文法書なんて一冊も読まないです。人間の口から出てくる言語ならなんでも大歓迎。人が好きなので、人と触れ合って言葉を覚えてしま

います。

ある専門的な本を読んでいたら、大人になると言語を司る脳の部分がどうしても硬くなってしまいうそうです。が、ごく稀に、少数ではあるけれども、脳のその部分が子供のままでいる人がいるそうです。僕はどうもその少数に入っているようです。子供が言葉を覚えるように、どんな言葉でも自然に身につけてしまう。その代わり、他に犠牲

ているだけで気持ちいいですよ。僕は面白い？ 面白いかな。そうかもしれないね。無神論のくせに直観で生きている。日本がなぜ好きかな。なぜ大阪にいたかとか、僕には全然わかりません。全部直観があつて、「じゃ、やるうか」と。なんでもそうです。

日本に来て熊本県の宇城市（旧小川町）に住んだ。その後京都で今の妻と出会いましたが、一週間半交際して求婚しました。僕は時間がもったいなく思った。直観でこの人だとわかっていたからです。「はい」と返事をもらって、「よし」と思いましたね。その後、妻のご両親は熊本出身だとわかり、僕たちの結婚のお披露目はお義父さんの弟さんのやっているお店でと言われたところ、それは僕がよく知っている店で、披露宴の給仕をしてくれた女性たちは全部僕の教え子たちでしたよ。まったくの偶然ですが、不思議でしょう？

無神論者ですが、ユングが大好きですね。ご存知ですか？ カール・グスタフ・ユング。フロイトよりユングが好き。ユングっぽく言えば、運命とか直観という言葉を使わなくていい。無意識の世界です。無意識の世界は意識できないものです。だから、無意識の世界と言う。意識している世界と無意識の世界がありますよね。意識している時は、無意識の世界が何をやっているかわからない。それがなぜか、意識の世界に「ひらめき」として上がってきて、「ああ、この女性はいい人だ、結婚しよう」とか、「日本文学をやろう」「大阪の堺市に行こう」とか。それを直観と言っています。が、無意識の世界ではわかっていることですね。ただ、我々は意識の世界ではそれを探ることはできない。無神論とは矛盾していない気がします。ひらめきで生きている。でも実感があるものだから否定できません。

クリストファー・リープス氏

カナダマニトバ州ウィニペグ市出身。マニトバ州立大学で英米文学の学士取得。教育学部の学士も取得し、ウィニペグで高校の先生を半年経験したが、自分には興味のない仕事だと気付き日本へ。京都大学大学院で国文学の修士を取得。その後、カナダのアルバータ州立大学で日本文学の修士を取得。さらに米国のコロロンビア大学で日本文学の修士を取得して、現在同大学の大学院博士課程を修了、博士論文執筆中。二〇一六年四月より、国文研助教。髭は新しい家伝をつくるため伸ばしている。地面に着くようになって伸び続ける。国文研の面接のために一度剃ったが、実年齢の三十五歳よりずっと若く見えてしまい気に入らなかったそうだ。



になる脳の部分があるわけです。僕は、数字はまったくダメです。歴史も混乱してしまって覚えられない。学問がきらいでしたが、童話が好きでした。毎晩物語を読んで、僕が母に文学をやりたいと言ったら「どうぞ、やりなさい」と。幸せであればよいと言ってくれましたね。

バチカン図書館とのコラボ

マレガプロジェクトがむすぶ国際交流

二〇二二年、バチカン図書館が、近世豊後地方の切支丹関係史料を大量に発見した。

総点数一万数千点。

イタリアの宣教師マリオ・マレガ神父が在日四十五年の間に収集し、バチカンに送ったものだった。

マリオ・マレガ神父

一九〇二年イタリア生まれで、ウィーンやトリノで教育を受けてサレジオ会の修道院に入ります。修道院はフラン

シスコ会やザビエル会など、いろいろありますが、マレガさんはサレジオ会。一九二九年に日本に来ます。途中出入りはありますが、一九七五年まで日本にいた宣教師です。マレガさんは宣教師としてはあまり活動的ではなかった

ようです。宣教師の仲間たちもそれはもう諦めている。彼には研究をさせておくのが一番いいと。だからこの収集活動や研究に専念できたわけです。マレガさんは一九二九年、サレジオ会第二陣の宣教師として日本に来ました。第一陣は一九二五年にやってきています。記録を見ると、第一陣で来た人たちは「南米か日本かと自分たちは思っていた」とありますね。つまりヨーロッパから見たら日本は南米と同じようなものだったわけです。そこへ行ったらもう自分は戻れない。バチカン法王によって派遣され、本当に骨を埋めるつもりでやってきています。マレガさんも二十代後半で宣教師として日本に来ていますから、その段階でもうイタリアへ戻ることは諦め

マレガ文書

マレガ文書の中には、日本の古文書が一万数千点、その他にマレガさんのメモや書簡類などがあります。マレガさんは言語に関しては天才的なところがあつたのでしょね。最初に彼がやったのは、古事記の日本語訳なのです。それは今でも研究の成果として通用しています。江戸時代の古文書を解読して史料集も出版している。「豊後切支丹史料」は日本語で書かれ日本で出版された史料集です。それを利用してイタリア語の論文もたくさん発表されているのですが、日本の切支丹関係の史料をきちんと読んで、それをイタリアに紹介したということでも、マレガさんは最初の人でしょう。史料集の刊行によって、彼がたいへん上質な史料を所有している、しかも、未収録のものが相当にあると日本人研究者たちは思いました。ところが戦後、史料についての情報が曖昧となり、行方不明となつてしまつた。今回はっきりしたのでありますが、一九五三年にマレガさんは史料をバチカンに送っていたのです。しかし、バチカンでもそれを忘れ、収蔵庫の奥の方で半世紀以上静かに眠っていた。二〇一一年、図書館の職員が、何か変なものがあるぞと引きずり出してみたら、保存袋に入つた大量の日本の史料だったということです。



地域的には豊後（大分）の臼杵藩の史料が大半で、宗門改めなどを担当した「宗門方」役所の文書です。他地域と違って、転び切支丹がたくさんいる。転び切支丹とは、切支丹から転んだ——近世初期のゆるい時代に切支丹になったのだけでも、禁制が強くなって改宗した人たちのことです。幕府は転び切支丹当人を含め五代に渡って監視します。転んだから無罪放免ではなく、ずっと追いかける。五代に渡って追いかける人たちのことを類族と言います。毎年類族調査があつて、一般の人とは扱いが違って非常に厳格というか厳しい。転んだのは誰で、この子は、その孫、そして曾孫とか玄孫とかというように追いかける。転びではない人に嫁いで子どもが生まれると、その子は類族になるというように、村人は当然、藩も管理が大変なのです。でも幕府のお達しだから一生懸命にやる。管理や報告の関係で類族系譜などを作成することも行っていたわけです。

いろいろなドラマがあります。村に類族がいたら村役人がその管理に関わらざるをえない。家から出奔していなくなったなどということになると、その探索は熾烈です。そういうことが起こらないようにという藩や村の役人の苦勞なども大変です。長崎など隠れ切支丹が多かつたところでは、村人はお寺の檀家の形をとっており、お坊さんがやってきて弔いをする。でもお坊さんが帰つた後で、弔いやり直すわけです。もちろんお坊さんはそれをわかつていて、あとは頼みますよというようなことがあつたといひます。

世界の東のはずれの国に、弾圧下で信仰を二百六十年も守り通した人たちがいる。明治になって隠れ切支丹が現れる。それはキリスト教的には大変な驚きをもつて伝えられ、布教の関わる大きな神話となる。だから法話などでも度々取り上げられています。その弾圧時代の史料をバチカンが持っている。布教の歴史を物語るものですから手放せません。日本人がこれを返却して欲しいと言え言うほど、手放したくない。二〇一四年一月、史料の発見をバチカンと日本で同時記者発表したのですが、AFP通信とかAFP通信も大きく取り上げ、世界中のメディアが報じました。しかし、日本と各国では報道の中身が違つてた。欧米ではキリスト教布教との関連で報じたのですが、日本では歴史資料が発見されたと報道していた。彼らが見ているものと、僕らが見ているものでは史料の価値が違うのかもしれないですね。

マレガ文書の調査

二〇一三年十一月二十六日、正式に人間文化研究機構とバチカン図書館が調査協力に関する協定を結びました。有名なバチカン美術館は観光客も多いが、図書館は城壁の中にあつて観光では入れません。図書館も大変大きな組織であり、とくに修復部門や撮影部門（撮影所）、研究部門が充実しており、修復部門では十数人の修復士がいて、十二世紀頃からの史料を修復しながらキチツと後世に伝えています。

調査方法をどのように提案するか考えました。日本人の研究者たちがやってきて史料が壊された、わけがわからなくなつたと言われ、てしまったら具合が悪い。そういう意味でヨーロッパにおける史料調査のありようとか、レベルが気になりました。そこで、しっかりと説明責任を果たせるような調査、必要となれば元に戻せる可逆性に留意して、もちろん相談しながら進めました。日本における古文書調査をバチカンに持ち込んだということですが、結果、「日本はかなり丁寧なやり方だね」と言われています。日本仕様はバチカンでも通用するし、参加者が分担して作業を手際よく進





めている点については驚いているようです。

二〇一三年から現在までにプロジェクトがどのくらい進んだかということですが、作業レベルをいくつかに分けています。第一レベルはバチカンの収蔵庫の奥に保管されていた二十一の保存袋を開封して、史料一点一点に番号をつける。つまり取り上げです。もとあった場所がわかるように記録しながら番号をつけて、戻せるように。その第一段階の調査が今年で終わります。四年間かかりました。

二段階は修復。日本は技術指導してバチカンが修復する。バチカンの修復士は以前から修復に和紙を使っており、裏打ちとか閉じた紐を直すなど、和紙使いに慣れています。今までにも全点チェックして数千点を修復しています。日本では修復部門が育っていない。所蔵史料をきちんと修復できるバチカンは欧州でも優れている存在かもしれない。やっぱすごいところですよ。

次の段階がデジタル撮影です。バチカン図書館の撮影部門も大変充実しており、大きな撮影所が複数あり、世界のさまざまな機関・撮影技師が出入りしています。マレガ文書はバチカン図書館が撮影を担当しており、カメラではなく大型スキャナーを利用します。我々が撮影することも考えたのですが、所蔵者が自らの所蔵史料の写真も撮れないのでは問題と考え、古文書撮影の方法も伝えました。日欧では縦書きと横書き、右から左など書く方向が異なる。撮影技師にこうした情報から伝えただけで、これも協力活動です。慣れるまでに数か月を要し、現在ではスムーズに処理が出来るようになりました。二十メートルくらいの長い巻物もあり、スキャナーが威力を発揮します。史料へのダメージも少ない。横長の帳面、イタリア語・ドイツ語・英語の新聞など大型のものも簡単です。このデジタルのフォーマットが、jpgとかtifではなくNASAの開発した非常に高細密な保存が可能なfitsです。バチカンはすべてこの仕様で、自らの所蔵物のデジタル化を進めており、マレガ文書とは直接関わりはないのですが、現在の日本のNTTデータなども関係しています。

デジタル画像が日本に届くと、文書目録作りです。手分けして二十人くらいが担当して進めています。このプロジェクトには、国文研では太田（尚宏准教授）とか、青木（睦准教授）、渡辺（浩一教授）、加藤（聖文准教授）などが参加しています。あとは歴史と東大の史料編纂所、大分県立先哲史料館、臼杵市の方々が関係しています。日本で

切支丹関係の研究者が減ってきていることが残念ですね。

日本の役割

グローバル化が叫ばれますが、これを支えるのはやはりきちとした調査とそれを支える基礎研究です。これができなかったらプロジェクトの基礎が固まらない。足下が盤石でないと飛行機は飛べないのですよ。だから相手が驚くくらいの技術力をもってあらないと相手にされないのがグローバル。幸いにこの分野での調査の動向は、グローバル化される前に日本国内で相当積み上げられてきたものが、結構高いレベルにあった。それは一種のガラパゴスかもしれない。今回は世界の動向なども見極めながら、相手とちゃんとすり合わせてそれを持ちこんでいます。

保存や修復の中心になっている青木（准教授）さんとも話して、日本でやっている自分たちのものを直輸出するのではなく、バチカンの修復士との話や技術交流を通して、新しいモデル、マレガモデルを作り上げようとしてきました。十月にはバチカンと共同で、日本の修復技術とバチカンでの取り組みをヨーロッパの人々に伝えるための研究会、ワークショップを開催します。日本の歴史・伝統を直接語るのではなく、バチカンとの作業を通じて、バチカンと一緒に伝える方法がどのような評価となるのか、楽しみにしています。日本の歴史・文化を伝える方法としても興味深いものと考えています。

バチカンとの共同作業は、あと四年から五年続きます。文書の撮影、それによる目録作成、そして共同研究が一層進められることになります。なによりも、バチカンに日本の切支丹関係史料が大量にあることをもっとヨーロッパの



人に知ってもらわないといけません。歴史文化を通じて相互理解が深まることで上質な交流やグローバル化が可能になるものと考えます。バチカンの史料は、我々にとって、またとない文化交流のための架け橋になるのではないかと考えています。その存在と価値を国際的な会議の場においても、積極的に発信することがプロジェクトの務めだとも考えています。

大友一雄氏

茨城県出身。日本史学者、アーカイブズ学者。専門分野は日本近世史、記録史料学。徳川林政史研究所研究員を経て国文学研究資料館、現在は教授・研究主幹。今般の「マレガ・プロジェクト」代表。九州で大友宗麟が打たれた後、その子孫が佐竹藩に預けられたという史実から大友宗麟とご関係があるのかとうかがうと、「ないですねえ。江戸時代、貞享年間に福島県いわき市にあった窪田藩のお家騒動で藩が潰れるんですが、僕のところはその家中で茨城に土着した家系みたいで、あんまり面白くない」のだとか、ルーツがわかるのが羨ましい。

異分野交流は国文研から

文系と理系を融合させる大型プロジェクト

大型プロジェクトは、一面「データベース構築プロジェクト」

なんだか文学とは程遠い気がするけれど、

実は一般人にも文学が身近になる嬉しいシステム

『日本語の歴史的典籍の 国際共同研究ネットワーク構築計画』

いわゆる大型プロジェクトの正式名称は「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」です。略称は「歴史的典籍NW事業」ですが、では日本語の歴史的典籍とはなんぞや？ということですね。簡単に言えば、近代以前、つまり明治時代までに日本人によって書かれた書物、古典籍のことです。二〇一四年から二〇二三年までの十年計画で、国文学研究資料館を中心に、国内外の大学や研究機関と連携をして進めています。

当初この事業は「日本語の歴史典籍のデータベース構築計画」と言われていて、古典籍そのものをインターネット上でどんどん公開しますよという仕事でした。国文研まで来ないと見ることができなかったものが、自宅にいて見られるようになるわけですから、僕のように地方にいた人間からすると、願ったり叶ったりなわけです。もともと国文研なんて敷居の高いところですし、夜中に開いてないですしね。研究者ではない一般の方々でも、古典籍を読みたいと思っているかもしれない。ウェブ上に公開されると、極端なことを言え

ば、国文研にアクセスしさえすれば、お金をかけずにダウンロードして読むことができ、研究者と同じ位置になれる。平等なわけですよ。これはきつと役に立つ。これは大きな、自分も役に立つこともしてみたいなと思って東京に来ました。

江東区の宿舍住まいですが、通勤時間は苦になりません。東京のラッシュは大変だと言われていたのですが、まだその大変さは経験していません。ラッシュとは反対方向です。大阪では勤めていた大学が南港というところにあつて、自宅のある兵庫県の篠山市から通勤に二時間かかっていました。福知山線が大阪から出ていますが、三十分には本しかない！それに比べると、時間を気にせずに電車にのればいいのですから楽です（笑）。篠山、ご存知ですか？栗や黒豆を使った和菓子が多い。和菓子は好きですねえ。基本的に関西は粒あんですよ。こしあんは東京の人が食べるものでしょう。

古典に親しむ

国文研のHPから「歴史的典籍NW事業」というところへアクセスしていただいて、「日本古典籍データセット」というところを見てください。ここからダウ

今までの経験や考え方からすると、一つひとつの画像を繰っていかかと思われるかもしれませんが、タグという便利な機能を使います。例えばウェブ上に公開して、みんなでタグをつけてくださいと言えば、短時間でできてしまうでしょうね。さらに、多くの人が見ているわけですから、国文学の本以外にもこんな情報があるとわかってきます。それ自体がものすごい情報ですし、新たな発見になります。以前でしたら、この本は国文学の研究者が読む本、この本は理学の研究者が見る本、医学の人が見る本と、縦に分かれていました。ここに横串を刺すように検索できたら、どうですか？また新しい学問が生まれてくるかもしれない。異分野の方とセッションしながら古典籍という素材のもとに共同研究していく、それが狙いです。大型プロジェクトとはこういうことなのだと思います。

実際の共同研究

情報学研究所とも共同で検索について研究していますし、お隣の極地研究所とはオーロラのことでも共同研究をしています。「古典」オーロラハンター」は市民参加型で、古典籍や天文に興味がある一般の方々に参加してもらいました。古典籍・古記録のなからオーロラに関する記述を抽出してもらったんです。「赤気」などという記述は「赤いオーロラ」を示しています。ここでみなさん思うんですね、「くずし字が読めないといけないんじゃないか」って（笑）。くずし字は、見るのも大変かもしれませんが、読もうとするから大変なんですね。文系の僕らは「字」として読もうとし

ますけれど、理系の人の発想は面白い！くずし字を輪切りにして、ひとつのスリットのベクトルを数値化する。そして同じものが他にあるかどうか探してくるわけです。読んで探すのではなく、形で探すわけです。くずし字を楷書にすることを翻訳と言いますが、いままでは全て専門家の手作業でした。ところが、公立はこだて未来大学と凸版印刷と国文研の共同でやって、簡単にいうと機械が半自動的に翻訳するということろまで実際には進んできています。

過去の歴史を知ろうと思ったら、地層であるとか氷であるとか、あるいは書物であるとか、それらを読み解くしかないわけですよ。今生きている中でわからないことは歴史の中に見ていくしかない。そうなるとお互い、何らかのセッションが必要になってきます。たとえば普通のノートパソコンで進めていると時間がかかって仕方ないものも、今後はもしかすると統計数理研究所の大型コンピュータでやれば一気に進んでしまふかもしれない。僕ら文系の人間は手作業しか思いつかないことも、理系の先生に言えば「こんなもの機械にやらせれば」と教えてくれるんです。逆にこういう書物にこんな記録があるよとお伝えできるかもしれない。お互いに平等な立場のネットワークを作ること、二〇二三年までの十年計画です。十年間でどこまでできるか。大きなフレームを作って、それを持続させること、それが国文研にとって大事なことです。そこに情報が蓄積されていけば、大きなデータベースになって役にたつのではないでしょう。

山本和明氏

国文学研究資料館 古典籍共同研究事業センター 副センター長・特任教授 大阪府出身。川端康成が出た茨木高校卒業。神戸大学から同大学院博士課程を経て、大阪の相愛女子短期大学、相愛大学勤務。二〇一三年十月、大型プロジェクトのために国文研に着任。本来は、十九世紀の日本文学の研究者。山東京伝を専門にする。が、国文研に赴任してからは、データベース構築プロジェクト事業に専念。極地研の一般公開にも参加、すっかり理系の先生のように見える。



文研に来て閲覧申請をし、お金をかけて紙焼きか何かに落とすという具合でした。それがオープンデータになりましたから、今まで一番困難だった材料入手という段階がものすごく簡単になった。古典の中の同じ図柄をババパッと見つけたいという時、他人の手を介さずに探したいという時など、材料を渡しますからどうぞ自由に使ってください、いちいち断らなくていいですよとしたわけです。するとそこから次の動きが起こってきます。「国文研のオープンデータの閲覧画面って見づらいね」となると、ある研究者が簡単に見られるものを作ってくれたり、とかね。こうして古典籍に親しんでいただける。

大型プロジェクトでは三十万点の画像データの公開を目標にしています。集めること自体も目標ですが、三十万点もの画像を、ひとりで全部見ることはできません。そこに「検索」が役立ってくるわけです。どうやって検索をかければ自分の必要な情報にたどりつけるか。検索機能の側面が大事になるんですね。私たちの

日本人のこころ

五七のリズムは日本人の精神活動

文学部、ここに日本文学科が消えようとしている。

日本人が日本の文化を知らなければ、

たとえ外国語をマスターしても何を語るのか。

文系は不要か

文学研究を取り巻く状況はとても厳しいです。若い研究者が増えていきません。それはひとえに就職先がないという現状によるものですね。日本のプレゼンスが下がっているということも理由に挙げられます。昨年には「文系不要論」が打ち出された。文系は要らないということですが、本当にそうでしょうか。

少子高齢化が進み、大学そのものの存続が難しくなる中、日本文学科は危機的状況にあります。文学をやっても意味がないと理解されている。国文科や仏文科をつぶして介護に換えてしまう大学もあります。介護もちろん大事です。でも文学研究と交換可能なものでしょうか。文学研究、特に日本文学研究は自分の国のことをよく理解するために必須なものです。たとえば江戸時代の女性の地位は決して低くはなかった。むしろある程度高かった。家計を握っていたのは女性だということを、今、日本人がきちんと理解しているでしょうか。明治以降、日本は男尊女卑になってしまったので、江戸時代もそうだと思っている。やはり文化をきちんと知り続けることは大事だと思います。

文系を存続させるために

文系は不要だと言われる反面、一方で「百人一首講座」などを開催するものすごくたくさんの方が参加されま

す。高齢者を中心に、社会での需要は増えています。団塊の世代が退職を迎えて、以前は女性が多かったのですが、男性も増えてきています。研究したい中年以上の人は男女を問わずたくさんいる。

こうした背景を踏まえて、大学共同利用機関である国文研は、言い換えれば研究者のプロ集団なわけですから、文系存続のひとつの方策として「研究する面白さ」を訴えていくべきではないかと考えています。

今回の国文研インタビューシリーズでは、今西館長を始め、デイデイエ・ダヴァン先生、クリストファー・リープズ先生は「日本文学のグローバル化」を話されましたね。山本和明先生は「古典籍を使つての異分野交流」を話された。それらもちろん日本文学研究を存続させていくための肝要な方策ですが、私は三つ目の方法として、やはり王道である「研究の面白さ」を伝えることが大事ではないかと考えています。理系でよくやっているサイエンス・カフェを、実は文系でもやっていますが、最先端の研究を広くみなさんに分かりやすくお伝えしていくのです。

定説をひっくり返す、

それが研究の醍醐味

私は後鳥羽院を研究しています。万葉集、古今和歌集、新古今和歌集という三大歌集のひとつ、新古今和歌集は後鳥羽院が作成を命じました。撰者を代表するのは藤原定家。



門になります。『毎月抄』はこの謹慎の少し前に書かれたことになっています。まさに「権威」として威信を保つ後代の作であると言えるわけですね。この時代にはたくさん「偽物」が登場しますが、ほとんどが定家の権威を借りて自分の活動を広めようとするものです。ところが、『毎月抄』だけは徹底的に定家が書いたものとして、ゴーストライターは黒子に徹している。非常に珍しい「偽物」なのです。

五七が刻む生活のリズム

近代短歌に対して、古典和歌には制約とルールがたくさんあります。それを知らないと言ひ解けない。私が『毎月抄』が偽物だと発表した学会で、もうひとつとても面白い発表があった。久保木哲夫先生とおっしゃる大先輩の研究発表で引かれた「みなそこにはるやくらむ みよしののよしののかはに かはづなくなり」という歌です。漢字を当てて解釈していくと、注釈書も研究書もすべて、「春や来るらむ」つまり「春がもう来るだろう」と訳しているが、それは間違いであると。古典文法は結構難しいですね。「くるらむ」の「らむ」は推量の助動詞で、基本は終止形に接続します。けれども「くるらむ」の「くる」がもし「来る」なら、それは終止形ではない。古文だと終止形は「来」。つまり「春がもう来るだろう」という意味合いなら、「春や来るらむ」でなければならぬ。そう、「くるらむ」は他の動詞なんです。終止形が「くる」になる動詞って思いつきますか？ 考えてみてください。わかりますか？ ……当り！ そうなんです。「暮れる」なんです。つまり「水

「後鳥羽院と定家研究」という本があるくらいこの二人の関係は面白いものです。定家は非常に優秀な人で、後鳥羽院が定家に惹かれて和歌を好きになり、そして新古今を構想した。ふたりはとても親密でしたが、撰者、つまり編集者である定家の権限までも行使して、後鳥羽院は自分で編集してしまつた。ふたりはやがて対立し、定家もプロですからプライドが許さない。後鳥羽院に反発し、仲が険悪になり、ついにはひどい喧嘩になってしまつたわけです。そういう状況下で後鳥羽院は歌論『後鳥羽院御口伝』を書いた。「定家はすばらしいけれどひとつだけ欠点がある。それはこの人の歌には心が無い」と。

定家も歌論をいくつも書いています。たくさんある歌論の中で「有心」を説いた『毎月抄』だけが本物か偽物かで長い議論になっていて決着がつかない。果たしてこの『毎月抄』は本当に定家が書いたものかどうか。その議論に私は、「毎月抄は偽物である」という証明をして、ほぼ決着がつかしました。そう、おっしゃる通り、今までの日本文学史を書き換える必要がありますね。間違いないでしょう。高校の教科書でも解説書でもね、お父さんの藤原俊成は「幽玄」、藤原定家は「有心」という理念を説いていると書いてあります。定家が「有心」を説いたことは定着している。それをひっくり返す。そのことこそ研究の醍醐味ですよ。

面白いでしょ？ ではなぜ間違えたか。現代人にとつては、春は来るものですよ。童謡も「春よ、来い」、ユーミンも「春よ、来い」って歌ってますし。でも、待ち遠しい春の到来を思い描く言い方は、古典の時代は「春や立つらむ」でした。明治以降、「立春」にちなむ「春立つ」という伝統的な言い方は忘れられ、春は「来る」だけになった。それで「春や来るらむ」とつい間違えちゃったんですね。どうですか？ 同じ日本語ですが、古典の時代と現代の違いをはっきりみてもらうと文化とは面白いなど感じるのではないのでしょうか。「Spring has come」は「春立ちぬ」の訳でもあるのです。

グローバルな社会になっていくのはいいいことだけれど、フランス人やイギリス人が日本の五七のリズムをどういう風に受け取ることができるのか。それは、やっぱりよくわからないですよ。意識はできても、「みなそこにはるやくらむらみよしのの」と、こういうリズムが本当にわかってもらえているかどうかはわからない。もらえているのかもしれないし、いないのかもしれない。今後、国際貢献していくときには、やはりこのリズムも考えていく必要があると思います。五七のリズムは、日本人の精神活動に深く結びついており、すべて根源的には和歌的要素と無関係ではないと思います。雅にたいして俗がある。それらが深め合つて第三者が生まれてくる。本丸の雅である和歌を学ぶと、五七のリズムが心に響く。感覚、感性の問題ですが、この感性を解き明かそうとするとところに日本文化を見直すエネルギーが生まれ、いかに文系が大事であるかが理解できてくるのではないのでしょうか。文化の重要性を、日本文学の古典が言い続けなくてどうする、と思っています。

寺島恒世氏

国文学研究資料館 教授 副館長。出身は長野県。二〇一七年三月に定年退官を迎える。専門は和歌文学でこの度の『毎月抄』(藤原定家)は定家の子孫の手になる「偽物である」という発表は、日本文学史を書き換えるほど画期的なことだった。

「有心」、つまり心があるという理念は問題の『毎月抄』にだけ出てきます。他のたくさんさんの歌論の中で一度も「有心」を説いていない。他にも「稽古しなさい」とか「失敗をしてはいけない」などということも、この『毎月抄』だけで説いている。それでも「偽物」であるという証明ができたので、今までは教科書にも記載されてきたのです。それほどよくできた「偽物」なのです。

私が『毎月抄』は偽物だと断定した一番の理由は、なによりも「偽物が作られた動機」です。後鳥羽院が「定家には心がない」と言った。こう批判されて一番困るのは誰でしょう？ そう、子孫です。定家の子孫といえは二条家、京極家、冷泉家と広がって、中世全体を覆うのですが、中世から見ると定家は絶大な「権威」でした。この「権威」が天皇によって批判されるというのは非常にまずい。「定家には心がない」という批判に対して、「いいえ、定家はちゃんと心を説いていますよ」という事実があればいいわけです。つまり『毎月抄』は定家の時代より後に子孫によって書かれたものが、定家の時代に遡って設定された、という「偽物」なのです。定家は後鳥羽院によって謹慎、蟄居閉

救え！
アーカイブズ

少子高齢化なんて言ってられない

シニアの力が活きる場所

過去の資料を救うことは

そのまま未来を救うこと

被災アーカイブズ・レスキューとは

もちろん災害発生時には人命最優先です。ですから国文学研究資料館では、災害発生直後、人のことが落ち着いてから収蔵資料の確認という段取りになっています。時間が経過しても大丈夫なように、建物の建て方から保存の仕方はもちろん、被災時のあり方まで対策してあります。しっかりとした日常の保存管理こそ、すぐれた危機管理と言えます。

阪神・淡路大震災の経験から、東日本大震災ではアーカイブズの救助は発災一カ月以内にレスキューが動かないと大変なことになると思いました。「公文書を救済しますよ」というメッセージは発していたのですが、それも受け入れられないほど大変な状況ではあったのだと思います。でも、できなくて心残りなこともたくさんありました。ゴミとして捨てられてしまった。

被災した公文書はなかなか即時レスキューということにならないのです。その理由は、ひとつには自治体の意識が「自らの文書」というものだから。公文書は役所の文書ではない。地域の方々の大切な歴史的記録なのに、地域住民のものを預かっているという意識が低いのです。二つ目には、被災そのものが「自己責任」だという意識。たとえばハザードマップには「ここは水害に弱い地域」と記してあるのに、その対応をしていなかった。それで大事な公文書

常総市の場合

東日本震災の時だけでなく、阪神淡路大震災の時もやはりそれぞれの地域資料、地域の公文書を救助してきましたので、長年の活動の一環として常総市も支援させていただきました。二〇一五年九月十日の水害で、常総市役所の行政文書が保管されている書架では、一メートルくらいの高さまで水に浸かってしまいました。中にはカビの生えてしまったものもあり、過去の行政の記録や戸籍簿など、数万点が水損していました。文書を風通しのよい場所で乾燥させたり、カビが増殖したひどいものはエタノールで洗浄したり。東日本震災後の釜石では海水でしたが、常総市では河川の水です。海水だとカビが生えにくく、自然乾燥が可能ですから、廃校の中で自然乾燥させました。真水はカビが生え自然乾燥が難しい。真空凍結乾燥という方法を取り

ジもめくれなくなる。それを真空凍結することで、凍ったまま乾燥させられるので元通りになります。

市役所のサーバーも水に浸かったのですが、停電していたのでデータは守られました。が、同時に電動書架は動かなくなりました。そこから人の手で資料を取り出すのですが、取り出す時には資料の並び方、順番というものがとても大事になってきます。十一月号で大友先生がバチカンのマレガ文書の調査について語っていましたが、それと同じで資料を取り出す時は元に戻せるように。バチカン図書館でも私が最初に手掛けました。私の横にいて撮影する人、資料を取り出す人など担当を決めてチームで動きました。このやり方はバチカンであらうとどこであらうと同じなのです。国文研の地下収蔵庫をご覧になったらわかりますが、保管するにはきちんと法則性にそって収蔵する。つねに元に戻せるように保管するので。



か、土地柄など、たとえ
ば地震とか水
害に強いのか
弱いのか、全
部記録に残っ
ている。津波
の場合、ここ
から下に住ん
ではならない
と書かれた古
文書とか、過
去の経験をか
ちんと記して
ある公文書は
とても大切で
すね。東北な
どは貞観の地
震の経験から
、また大きな
地震が起きる
と言われている、現実に

災害レスキューの目的

けれども、レスキューの最終目的はもとに戻すことではありません。地域の人が公文書を使えるようにすることです。地域の人の記録として公開されることが一番のポイントです。助けることだけが目的じゃない。私たちの生活を豊かにしてくれる「情報」を、過去のものは現在へ、現在のものを未来へちゃんと繋げていくこと。必要じゃないと思う人もいるかも知れませんが、必要だと思う人も未来にいたるわけですから、その人たちのためにちゃんと残してあげる。残すには、歴史資料をさまざまな科学的技術を使って復元してあげる。そして見られるように、使えるようにすることが目的です。

公文書災害レスキューのこれから

起きたということなのです。

現在のレスキューのあり方の始まりはフィレンツェの大洪水にあります。一九六六年、豪雨によりフィレンツェにあるアルノ川が決壊、ダ・ヴィンチの素描など世界的遺産を含む何百万点もの収蔵品が被災しました。フィレンツェ文書館やフィレンツェ中央図書館の遺産を救おうと世界が動き、国際的な救援活動が開始され、五十年経った今も継続されています。被災した世界的遺産をどうしようというところから、冷凍とか真空凍結乾燥などの方法や技術が私たち専門家同士のなかで発信され享受され、今のレスキューへと育ってきたのです。

日本でレスキューに対する意識が変わったのは、やはり阪神淡路大震災以降ですね。それまでは被害に遭ってもレスキューに来て欲しいとも、レスキューに行かないやというものもなかったけれど、阪神淡路以降は地域の文化遺産

保存しておきたいということになった場合、ご相談いただければきちんとした保存の科学的見地でのアドバイスをします。レスキューも専門ですが、これが私の日常の研究ですから（笑）。

すから
(竿)

国文学研究資料館 准教授。アーカイブズ・レスキューの第一人者でもある。一九九二年に放火で焼けた民間アーカイブズを救助したが、自身がレスキューに携わることになった始まり。一九九五年一月十七日に発生した阪神・淡路大震災。発災二十四日後に神戸市水道局主査が自ら命を絶つたというニュースが流れた。ライフライン復旧のため水道局の図面が被災し、それをすぐに見つけれなかった。行政文書が使いやすき形で復旧できなかくこの重大性を痛感。以来、自治体の行政文書の救助・復旧に取り組んでいる。行政文書は役所のものではない、地域住民のためのもの、歴史資料として重要なのだと熱く語ってくれた。

サブカルは古典への入口

『うた恋い。』から百人一首へ、

サブカルから古典の研究者が生まれる可能性

和歌は人気がない、学生が食いつかないと言っ前に

漫画を入口に、潜在的な古典好きを掘り起こす

日本人が好きな「レトリック」

就職活動などで自己アピールしてくださいという場面がよくあります。「私は真面目で仕事に情熱を持って働ける、そういう人材です」というストレートなアピールの仕方って当然ありますよね。でも例えば「私は水のような人間です。器によってさまざまな形を変えられるので、御社という器に合わせる自信があります」という言い方をすることもできます。どちらがインパクトが強いかと言ったら、後者ではないでしょうか。これはレトリックです。同じことを伝えるにしても、少し工夫をするだけでまったく伝わり方が変わってくる。まさに和歌がそうなのです。SNSが盛んな現代では、短い言葉でやり取りするのが普通になっています。ちょっとした言い回しはレトリックに凝ると、相手に「おっ！」と思わせることができる。そういう時代だからこそ、SNS世代は和歌への親和性が高いのではないかなと思っています。レトリックは教えられてできるという部分もありますが、本能的にやりたいことではないのでしょうか。だからこそ、日本にはこんな表現の歴史があるのだと知ることは大切だと思いますね。レトリックの部分を除いてしまうと、言葉の文化がとても痩せた文化になります。あまり構えずに、ごく自然に私たちの中にあるものだと思ってみたい。面白いと思わない人もいるかもしれませんが、潜在的に面白いと思っている人に、日本語

を書いたり話したりする中での豊かな部分だと、その魅力を知ってほしいですね。だってね、これだけ大喜利とかなぞかけとかが好きな国なんですよ。夜中にNHKで放送しているケータイ大喜利にしても、「うまいこと言うなあ」ですよ。和歌だって同じで、「うまいこと言うなあ」「上手に作ったなあ」という見方で、面白さを知ってほしいです。私は新古今時代の和歌の研究をしています。本歌取りの研究ですね。高校の古典の授業などでは本歌取りを、「古い歌の言葉を使って自分の歌を作ること」と説明していますが、それだけではなくて、昔の言葉が「わかる人にはわかる」キーワードになっているのです。昔の人たちにとってはごくごく常識なことだったのですが、今の私たちには常識ではないので、もうそれがわからない。パロディもそうですが、それに気づいた時には「そうか！そういうことと言いたかったのか」と作者の気持ちや意図がわかる。それが面白いのです。ある時甥っ子と映画「クレヨンしんちゃん 嵐を呼ぶジャングル」を観ていたら、ディティールがちょっとずつ一九七〇年代風なんですね。最初はなぜこんな風になっているのかわからなくて。でもふと「これ、コッポラの『地獄の黙示録』のパロディなんだ」と分かった時、もやもやしていたものがすっきりしました。パロディとか本歌取りは作者の意図がパッと見える瞬間があります。そこが気持ちよくて楽しいところです。本歌取りやパロディの文化は息が長いですけど、わからないまま放つ



です。結果的に和歌にも触れることになる。学習漫画は、それはそれですばらしいし役割があると思うのですが、私は『とりかえばや』や『ちはやふる』のように一般の商業ベースに乗っている漫画の力はものすごく大きいと思っています。私が小学生の頃は『あさきゆめみし』を普通に少女漫画として楽しんで読んでいましたが、今はやっぱり源氏物語の勉強のためにということになっていて、少し残念な気がしますね。

漫画から古典にいざなう

入口って大事だなあとあります。大学で教えていた時よりも今の方が強くそう思います。もちろん賛否両論はありますが、いずれにしても人口を増やすことはとても大事です。

私は国文研で「青少年に向けた古典籍インターフェースの開発」のプロジェクトを受け持っているのですが、まだ本格的に古典の勉強を始めていない人たちにどうやってアプローチするかのヒントが漫画にあるのでは？と思っています。元の古典に忠実かどうかよりも、その古典の一番面白いところを伝えるよう漫画化してくれたら、それでいいと思うんです。私が小中学生の時っていい時代だったのかもしれない。『あさきゆめみし』が流行っていました。また、氷室冴子が『さ・ち・えんじ』という小説を書いていて、その元は平安時代の『とりかえばや物語』なんです。『とりかえばや物語』は原作として人気があって、現在、さいとうちほの『とりかえばや』が連載中。男女逆転を扱う『とりかえばや物語』は心理学の観点からも注目されています。できることなら男女逆転してみたいと思った人が一千年前にもいたのでしょうか。そこが作品の一番面白いポイントだし、昔の人も今の私たちと同じなんです。

ておかれたら作り手にとって残念なことになるじゃないですか。作者が仕込んだなぞなぞが解ける感じが、私は一番面白い。これか！みたいな（笑）。

千五百万部も売れている『ちはやふる』

ご覧のように、私の書棚はそっちもこっちも漫画です（笑）。こちらの中公文庫版の「マンガ日本の古典」は漫画家を選んでいいシリーズだと思っていますね。実力のある有名な漫画家が描いています。『今昔物語』は水木しげる、『平家物語』が横山光輝、『太平記』はさいとうたかを。セレクトというかテーマと漫画家の組み合わせがいいんです。古典は漫画家にとっても題材の宝庫だと思います。夢枕獏が原作ですが、『陰陽師』などいいところに目をつけたと思いますね。

『ちはやふる』『超訳百人一首 うた恋い。』『とりかえ・ばや』といういろいろありますが、ここを古典のスタートにしている人っていると思うんです。研究者はこういうものがあるのは知っているし、ちょっと手に取ったことはあるかもしれない。けれどあまりこうした漫画を大事にしない。私はもっと大事にしたいのではないかと思っています。私自身、古典文学への扉が『あさきゆめみし』でしたから。

『ちはやふる』なんて千五百万部も売れているんですよ。千五百万部も売れているということは、それだけの人が大学の勉学はアカデミックでしっかりした学術的内容を教えるものだという方は多いですし、大学の教育にあまり漫画のようなものはいらないという方もいらっしゃると思いますが、それに比べられる学生ばかりではなくなっています。『うた恋い。』は百人一首を漫画にしているのですが、言葉でどれだけ説明しても難しいことが、和歌と漫画を合わせて説明すると非常にわかりやすくなる。古文は難しいしわからないという学生に、すごく大きい力になるのではないかと思います。

『文豪ストレイドッグス』ってご存知ですか？ 昨年の夏にはコンビニとタイアップ企画もやりましたね。太宰治、芥川龍之介、中島敦、谷崎潤一郎といった文豪がイケメンにキャラクター化されて、特殊能力を発揮してバトルする漫画です。作家がキャラクター化されているだけといえただけなので、以前の私だったら通り過ぎてしまったでしょう。でもね、この「文スト」のおかげで今まで谷崎潤一郎を知らなかった子が、その名前を知るわけです。しかも必殺技の名前が代表作から来ている。『細雪』とかね。中島敦の『山月記』という必殺技は虎に変身できる能力。与謝野晶子は『君死給勿（君死に給ふことなかれ）』で治愈能力、生き返らせることができる（笑）。人気声優を使ってアニメ化もされていて、森鷗外記念館ともコラボ企画しましたね。

『月に吠えらんねえ』は萩原朔太郎の「月に吠える」から名を取って、近代詩歌の作者をイメージした漫画です。流行物はバカにならないと思いますよ。一過性のものになりがちですが、何がどのようにヒットしているのかは知っておきたいですね。

立川はミニ秋葉原と言われていますよね。『聖☆おにいさん』が実写化されますでしょ？ ますます注目の街なのではないですか？

小山順子氏

京都生まれの京都市。京都府立大学、京都大学大学院と進学した。最初の就職先が奈良で、ここでも関西から出ることはなかった。関西での居心地は良かったが、ワンステップ成長したいと国文研の公募に応募。資料も多く、第2線で活躍する先生方が揃う研究の本場、憧れの国文研で四年目を迎えている。現在は立川在住。国文学研究資料館研究部 准教授。

百人一首に触れているということ。毎年、競技かるたの名人戦、クイーン戦がありますが、『ちはやふる』はその競技かるたに没頭する女子高生の話です。これだけ文学は人気がないとか古典からみんなが離れていくと嘆くなら、千五百万部売れている漫画にも目を向けたらいいのではないかなと思っています。私は結構本気で読んでますよ（笑）。和歌って枕詞とか掛詞とかでわかりにくいと言われてしまいうのですが、そのハードルをちょっと越えてくれれば、今までの自分の会話とは違う面白い世界が広がっていると感じてほしい。

様々な出版社から多くの学習漫画が出ているのですが、『ちはやふる』等とは全然違うと私は思っています。前者は勉強したい人しか読まない。古典の勉強のためにある漫画ですね。『あさきゆめみし』をネット検索すると「センターの古文対策に最適」と出てくる。センター試験を受ける人って国民の何割いますか？ 『ちはやふる』はセンター試験などに関係なく、競技かるたを頑張っている女子高生の話を読みたい人が、エンタテインメントとして読むわけ

国文研でやっていたこと

大学院があります

国文研にある総研大の話をしてくださるというのに

無理を言って『NARUTO』の話してもらった。

おもしろかった。

ナルトはなぜ金髪か

小学六年生を対象に文部科学省で『NARUTO』を使って日本古典籍の話をしました。登場人物のひとり「さくら」ちゃんの衣装を着て（笑）。『NARUTO』って忍者の話なんだけれども、ヘビとガマとナメクジの三疎（すく）みのお話でもある。その出典は日本の古典にあるということ、ナルトって金髪でヒゲが生えているでしょう？ それは金毛九尾の狐が由来で、もともとはこういうお話ですよということとを古典籍を見せながら話しました。子どもたちはみんな集中して真剣に聞いていましたよ。

うずまきナルトは『NARUTO』の主人公。金毛九尾の狐のチャクラが体に入っていて、そのおかげでものすごい力が出てしまう。これは『三国妖婦伝』といって、インドと中国と日本の女性に狐が憑りついて、権力者をたぶらかして悪いことをさせるという話で、江戸時代後期にとっても流行りました。『三国妖婦伝』の中で一番すごいのが中国の姐己（さぎ）。それに比べると日本なんか非常におとなしくて、体が光ってしまう程度なんです（笑）。玉藻前（たまもまえ）という人に憑りついたのですが、九尾の狐の正体を現して那須野原に逃げる。そして三浦介（みづへ）と上総介（かみづへ）に退治されます。ところが、路傍の岩のような石に九尾の狐の執念が凝り固まって、ここを通る人が倒れてしまうんですね。硫黄がガスになって出ていたのかな。それで『殺生石』と呼ばれた。でも玄翁

和尚の祈りによって成仏すると。その石を割ったのが玄翁なので、金づちの大きいのを玄翁って言うでしょう？

もうひとつは三疎（すく）み。ガマはナメクジに強いけれどヘビには弱い。ヘビはガマには強いけれども、ナメクジに弱い。ナメクジはヘビには強いけれども、ガマには弱い。それが大蛇丸（おおろ）と綱手（つなで）と自来也（じらいや）ですね。だから三者が顔を合わせる時と動けなくなっちゃう。古典籍に『児雷也豪傑譚』というものがあるって、ガマの児雷也（こらいや）はヘビにいつもやられてしまうのだけれど、綱手姫に助けられる。必ず強いものに弱いものがある、つまり終わらない戦いの話なのです。一番の疑問は、なぜナメクジはヘビに勝つのか、です。わからないでしょう？ それを今回私は解きました。一番最初の中国の本ではナメクジではなくて、ムカデだったというのが答え。日本に伝わった時になぜナメクジになったしまったかはわからないけれど、中国の百科事典にはガマとムカデとヘビと書いてあります。『莊子』などの大昔から中国の本にはムカデがヘビを食べると書いてある。ヘビはムカデに食べられちゃうのです。その謎が解けた時は私も嬉しかったですよ。自分でも楽しかったですね。

国文研にある大学院

国文研の中に総合研究大学院大学があります。一九八八（昭和六十三）年に日本で初めて設立された大学院だけの大学です。修士課程を修了しているかそれと同等の学力があ



ネ東洋美術館の日本古典籍調査をして、昨年目録を出しました。キオツソーネは明治のお雇い外国人で、お札のデザインをするために呼ばれて来たイタリア人です。彼は元々画家で、皆さんが西郷隆盛と言われてイメージする肖像を作った人です。高給取りで日本に長く居て日本で亡くなったのですが、浮世絵とか本、飾り物、装飾品など、たくさん買い込んだ。明治初期だと江戸時代のものはかなり安く手に入ったのだと思います。それらは彼の死後、故郷ジェノバに送られました。それがキオツソーネ東洋美術館となって、古典籍や絵本類がたくさんあります。そこで絵本を中心とした古典籍の調査をし、十七年がかりで目録を完成させました。国文研には海外調査の予算がないので科研にお金を申請しなければならぬ。さらに他にも仕事があり

ありますから、申請が通っても一年に一度しか行かないのです。イタリアの資料調査を始めたのは四月から新館長に就任されるロバート・キャンベルさんです。彼が以前国文研に在籍していた一九九六（平成八）年に始めて、私も一九九八（平成十）年から参加しました。キャンベルさんが二〇〇〇（平成十二）年に東大に出てしまわれてからは、在イタリア日本古典籍調査の責任者を私が引き継ぎ、昨年ようやく四つめの最後の目録を完成させてホッとしました。

二〇〇二（平成十四）年に最初に完成させたのは、ローマのサレジオ大学マリオ・マレガ文庫の目録です。昨年「えくてびあん十一月号」にも掲載されていましたが、サレジオ教会のマリオ・マレガ神父が、在日した四十五年間に集めた日本資料の文庫です。一九九六（平成八）年にキャンベルさんがパチカン図書館で出会ったサレジオ大学のオリバーレス神父から「サレジオ図書館に日本の資料や本があ

る方ならどなたでも入れます。国文研の日本文学研究専攻の特色として、日本文学やその周辺分野において文化資源、つまり本とか一枚刷りとか文書とかね、そうした現物に基づいた専門性に裏打ちされた、しかも国際的に魅力的な研究を行える研究者を培っています。文学研究を実証的にやることを売りにしていますから、そこは外せない。でも、今の時代はとにかく国際化、グローバル、なんです。だから細かいことを実証しようとかだわっても、そこにこだわの意味を外国人にわかってもらえないと、興味を持たれない。実証的に、でも理論も優先させて……このふたつを両立させるのは難しいです。

国際化って大変ですよ。言葉の問題もありますが、感覚がまったく違うから。特に海外研究者には、目前に現物がたくさんあるわけではない。実証的に研究してと言われても難しいのです。だから海外研究者は理論とか評論とか見方とか、そういうものに魅力を感じるようです。江戸時代の「みたてとやつし」などには興味を持つようです。『みたて』は社会風刺の意味をもつパロディではない日本的な表現方法で、し、「やつし」も中国のものを日本化した日本の文化的特色が反映されているわけだから、どっちも日本の特色ある表現様式なのです。だから外国人に興味を持てる。総研大の学生は優秀です。日文学専攻は設立十五年も経っていないのに、受賞者が多いんですよ。留学生も含めていろいろな賞をいただいています。

るよ」と聞いて行ったのが最初ですね。そこにはマリオ・マレガ神父が亡くなっているから、未整理の混沌状態で膨大な資料が放置されていたのです。それを六回の訪問で整理し調査し帙（し）に装填した。古典籍調査って、日本でやるのも結構きつい。それを海外でやるのは大変です。しかし最も労力がかかるのは、日本で様々な本で調べながら目録を作ることです。調査カードから目録への打ち込みは、様々な大学の院生がアルバイトでやってくれましたが、校正は四つとも私がやりました。そしてキャンベルさんが解説に、「マレガ神父がどこからか隠れ切支丹資料を手に入れたらしいので、様々な神父に聴いて探したが出てこなかった」と書きました。すると十年経って、目録を差上げたシルビオ・ヴィータ先生から「出た！ しかもパチカンから」という連絡をいただいたのです。それで二〇一二（平成二十四）年三月にヴィータ先生とパチカンへ見に行ってみると、二十一袋の文書でした。これは手におえないというので京都府立総合資料館の井口和起先生に相談し、国文研のアーカイブズ担当者達にお願いしようということになりました。

パチカンにある史料を青木睦さんのご専門である日本の保存方法を使って保存するというのは、これは本当に国際連携協力ということになり、私のマリオ・マレガ文庫調査と目録作成は、筆舌に尽くしがたい多くの困難もありましたが、結果的には本当によかったと思っています。隠れキリシタン史料はクリスチャンの方たちにとっては迫害された歴史ですから、新たな聖人が何人もでてくる、そのくらい大変なことなのです。日本人にとっては歴史の一部ではないのですが、世界中に響き渡った発見でした。マレガ神父が収集した「隠れ切支丹史料があるはずだ」というキャンベルさんの熱意が実った結果です。

山下則子氏

国文学研究資料館 教授、総合研究大学院大学日本文学専攻 専攻長、高校教師を十六年務めたあと、国文研に在籍して十九年。五年前から総研大の専攻長だが、このあと立川の国文研、大阪の民博（国立民族学博物館）、千葉の歴博（国立歴史民俗博物館）、京都の日文研（国際日本文化研究センター）すべての大学院の文化科学研究科長に就任予定。いっお会いしても穏やかで優しくて、「すごい」イメージがないのだが、実はすごい方。何よりも五年前のインタビュー時とまったく変わっていない、お若いままなのが一番すごい。まさに永遠の美を保つ「五代目火影（ほかげ）綱手」のリアルバージョン。

在外古典籍の調査研究

もうひとつ。私が関わった特別な仕事、それは在外古典籍調査です。私はイタリアのジェノバ市にあるキオツソー



立川の研究者たち 国文学研究資料館 編 インタビューで知る「国文研」の人と仕事

発行日 平成 29 (2017) 年 3 月 17 日
編集 国文学研究資料館・有限会社えくてびあん
デザイン 池田隆男 (WATER DESIGN ASSOCIATES)
印刷 三浦印刷株式会社・DECK C.C.
© 人間文化研究機構 国文学研究資料館・有限会社 えくてびあん

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国文学研究資料館
〒190-0014 東京都立川市緑町 10-3
TEL 050-5533-2900
有限会社えくてびあん
〒190-0023 東京都立川市柴崎町 2-1-10 高島ビル 4 階
TEL 042-528-0082



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国文学研究資料館

文芸春秋